
蒼焰舞 Ruka

風斬黎歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼焰舞 R u k a

【Nコード】

N O 2 3 6 Y

【作者名】

風斬黎歌

【あらすじ】

13年前に京都で起こった悲劇から13年。16歳になった青咲天音は、刀の妖怪「瑠火」を体に秘めながらも、「人間」として、児童養護施設「あかる」の仲間とともに明るく生きてきた。

しかし、「瑠火」が高校の入学式直後の教室で出会った女子生徒から、異常な能力を感じ取り、天音に警戒するように告げる。その女子生徒がもつ能力は、教師でさえもねじふせてしまう、恐ろしいものだった…

第0章第0節 血涙辛苦（前書き）

はじめてここに投稿してみました。

書いているうちに、なんだか天音という女子学生が自分の中でかっこよくなっていく気がします。

残酷描写が苦手な方は、見ない方がいいと思いますが、刀や超能力の戦闘シーンが好きな人には、お勧めしたいです。

これからもがんばって書いていきます！

第0章第0節 血涙辛苦

第0章第0節

血涙辛苦

1998年7月20日。「死者の魂があの子から帰ってくる」と言われるお盆休みのさなかにそれは起こった。

京都各地の名所から怨念の柱が立ち上り、小規模の百鬼夜行が大規模発生して、京都府の中心に向かって行進をはじめたのだ。

機動隊と京都府警直屬機関の殺人二課が全員出動し、各地の名所から半径1?を封鎖した。百鬼夜行をこれ以上拡大させないため、何より、府民の命を守るために。

しかし、住民の避難が間に合わなかった。多くの人が、「妖怪」が自分達を殺すかもしれないと言われてもなかなか信じなかったのだ。とくに若者は、警察が言っていることを的外れだと言って嘲笑った。本物の百鬼夜行を目の前にするまで…

絶叫と悲鳴が響き渡った。

大人も子供も殺された。子供は、殺される直前の両親の目の前で串刺しにされ、肝を奪われて死んだ。大人は、体を抉られて、苦しみながら死んだ。

救い主など、いない世界がそこに広がっていた。

しかし、妖との戦闘を勝ち抜いた殺人二課の部隊が到着し、百鬼夜行の者どもは滅された。

百鬼夜行による犠牲者は、あまりにも多すぎた。だが、そのような血塗られた戦場の中で、生き延びた人間は確かにいたのである。

「お前さんも、敵か」

鋭い声で、老人は目の前に立つ男に問いかけた。

「いいえ。陰陽師です」

問われた男は、静かに答えた。しかし、男は内心戸惑っていた。

この老人は…腹に致命傷を負っていた。若者でも意識が飛ぶほどの深い傷だ。今頃死んでいてもおかしくない。そもそも生存する可能性は低い。老人は赤ん坊を抱いているが、一体どうやって赤ん坊を守りながら生き延びたのだろうか？

「…人命救助なら、わしは必要ない。あの世に逝くことは確定しているからな。しかし…アマネを連れていくわけにはいかない。わしが守り抜いた唯一のもの。わしの初めての孫だ」

老人の独白を聞き流して、彼は赤ん坊に目をやった。なんと、眠っている。何も知らず、何も感じずに…

「今日、生まれたばかりじゃ…可愛いだろう？」

「ええ、そうですね…って、え!？」

彼は、赤ん坊から流れ出る「臭い」に気付いた。

「あんたたちはまさか…！」

「アマネを殺さないでくれ、頼む！さっきも言ったように、わしの大切な孫なんだ…青咲奏純という男が、生きた証なんだ…頼む！」

「この子が将来人間として生きられないことを知ってて言ってるんですか！」

「…その時は、お前さんが殺してくれ。この子が殺人だの発狂だのはまずありえんがな。全ての責任はこのわしにある。この子は人間と変わらない人生を過ごす。絶対に発狂しない。わしが約束する。老人はそう言い切った瞬間に、赤ん坊から顔をそむけて吐血する。

「ソウジュンさん！」

「頼む…この子を…この子が助かる見込みがつくまでは、わしは死んでも死にきれない…」

老人の目から涙があふれた。老人は、苦しそうにしながら、彼に

赤ん坊を差し出して、懇願した。

「わかりました」

彼は、断れなかった。老人のその目と涙と、傷を見て、どうして断れようか。彼は、どんなに冷酷な装いでふるまっても、やはり優しい男だった。

「おお…頼みましたぞ。その子の名はアマネ。天に響く音と書く。性別は女。どうか…頼みませう…」

老人は、この陰陽師に赤ん坊を託したわけではない。老人が、本当に信頼していた者は…

第0章第0節 血涙辛苦（後書き）

この小説で、「わけわからん!」というような箇所があれば、
斬黎歌のマイページの「活動報告」を見てください
風

第1節 桜花高校入学式

目を覚ます。

天音は、やはり自分のベッドの上に転がっていた。何か夢を見ていたような気がするが、よく思い出せない。良い夢ではなかったと思う。

もう朝7時を過ぎていた。二人部屋のルームメイト、綾小路夢乃はすでに起きていた。眠そうに目をこすりながら、真新しい制服に着替えている最中だった。

「おはよう、天音 ……」

「おはよう」天音は微笑んで挨拶を返した。

今日は、桜花高校の入学式だ。

この日のために、天音は自分の髪を黒染めしていた。諸事情あって、生まれつき赤毛なのだ。めつたにない赤い髪と、外国人に似た顔立ちと、長身のせいで、彼女はまるで外国人のように見えた。その風貌は、髪の毛に黒染めを施しても変わらなかった。

「今日の高校は設備が綺麗なんやって！」

「…そりゃあ、私立やからなあ。公立高校よりかずっとお金の余裕はあるやろ」

夢乃の長いおしゃべりに付き合いながら、天音は学校に向かった。学校に着くと、二人は昇降口の壁に張り出されたクラス分け名簿に目を凝らす。

「…あった。夢乃とは違うクラスやな」

「ええっ!？」

「大丈夫、きっといい友達ができるさ。「小さくて」カワイイ夢
乃なら」

「小さいって言うな!」

天音は笑いながら、夢乃に背を向けて廊下を走った。

天音は、平和な高校生活を期待していた。今までの日常が、ことごとく荒んでいたからだ。黒染めを面倒くさがってほっといたのは大きな間違いだった。普通の人とは違う外見のために、不良や性根の悪い女子たちに目をつけられ、何度も彼らと戦わなければならなかった。

しかし、この高校は校則は厳しいが、生徒の品行はよく、タバコや麻薬といった不良要素とは全く無縁だという。ましてや、苛めなどの生徒間の不祥事も、今まで一度も起きていない、と評判は最高だった。

彼女はルンルン気分で教室に入った。しかし、一番初めに、ある一人の女子生徒と目があつたとたんに、幸せな気分が吹っ飛ぶことになる。

「臭うぞ、あの女…心の闇が異常に広がっている…あのような子供が異能の力をもっては、大変なことになる」

天音は、うんざりしながら、学校の受付で指定された席に座った。ちょうど、目があつた女子生徒のすぐ前の座席だった。

(それはどついついこと?)

「あの子には関わるなよ。あの子は厄介な能力をもっている」

(どんな能力があるって?全く…)

「簡単に言うと、全てが思い通りになるんだ。例えば、嫌いな奴に対して、「死ねばいい」と思ったことはあるだろう？あの子がそう思ったら、あの子に嫌われた奴は24時間以内に死ぬってことさー」（それはまた…嫌な能力だな）

そうした秘密の会話の中で、天音は早くも自分の望みがかなわな
い嫌な予感を感じていた。そういう類のものとはあまり関わりたく
ないし、関わるきっかけがあるとも思えなかった。

けれども…そんな非現実的な存在とは知り合いたくないといくら
天音がのたまっても、天音自身が「人外存在」なのでどうしよう
もない。いくら人間としての生活に慣れても、人間の友達ができて
も、異形は異形だった。

青咲天音は人間ではない。

「真羅刀」と呼ばれる刀の妖である。戦国時代の戦に何度も使わ
れた刀が、血の味を忘れられなくなり、自我を持って、人間に憑い
てしまったものだ。本来、真羅刀に憑かれた人間は魂を乗っ取られ、
発狂して、自ら「真羅刀」そのものの殺人鬼になってしまうが、彼
女の場合は違った。

天音の場合、物心ついたときには、体の中にすでに瑠火がいた。
赤い髪も、瑠火が天音を宿主として選んだ影響らしかった。けれど
も瑠火は、いつか天音の体内にいたのか、どうして天音に憑いたの
に魂を乗っ取らなかつたのかを、決して語ろうとはしなかつた。だ
から、天音の出生については、天音が自分で考えるしかなかったが、
最近ひとつの結論にたどりついた。

「どうも、生まれたその日から私は瑠火と一緒にいたらしい。

天音が狂っていない理由については、考えようとも思わなかつた。

何故なら天音は、不良相手に瑠火を体外に出して威嚇したことはあっても、人を斬ったことはない。斬ったことがないならそれでいいじゃないか、と天音は考えを完結させてしまったのである。

さて、高校生活の始まりに話を戻そう。

瑠火が天音に警告していた女子生徒の名は、田山華。見た目はいかにもギャルっぽい感じで、規則の範囲内でうまくお洒落な髪型をしていた。少なくとも、おとなしい生徒とは思われていなかったが、成績もよく、一部の教師には気に入られていた。

しかし、田山は入学式から2週間目に、本性を現した。

入学してからすぐに、田山は取り巻きをつくった。その取り巻きには、男子も女子も等しく混ざっていて、6人いた。それだけならまだいいが、田山は次第に傲慢になり、取り巻きと一緒に、同じクラスの川口志信という男子生徒をいじめ始めた。

一体その子に何の恨みがあるのかと皆が不思議になるぐらい、激しくその少年をいじめめる。皆は見えて見ぬふりをしていたが、天音はそれを黙ってみていられるほど、田山を怖いとは思っていなかった。

放課後、川口はいつものように、男子に無理やり立たせられ、男子トイレに連れて行かれようとしていた。それを、田山が奇妙な微笑みを浮かべて見守っている。

「…おい」

やめろ、天音！

「…なあに、青咲さん」

「なんでそいつをいじめてる？」

天音の思い切った質問に、空気がぴんと張り詰めた。

「…そんなこと、聞いてただですむと思ってるん？」

「思わない。田山さんはサディスティックな人みたいやからな。

だけど、はつきり言わせてもらう。あんたがやってることは度を越

してる！」

「…皆」

田山の呼びかけに、女子がわずかに頷き、天音に近づいてきた。

「じゃあ、あんたもあたしらと「トイレ」に行く…？」

「…」

天音はにつこりと笑って、右手の掌を広げて見せた。不動明王の梵字がまるで刺青のように刻まれている。その梵字から、銀色の刃がすうつと突き出てきた。

「ひっ…！」

一人の女子が、怯えて後ずさる。天音の掌から出現した金属物質は、徐々にその姿を現していく。数秒後、天音は日本刀を手にしてすでに動いていた。

「えっ…まさか…きゃああっ！」

恐怖をあらわにする女子のみぞおちに、天音は日本刀の柄を突き立てて、彼女を気絶させた。

「だっ、誰か…！」

「誰かを呼びに行くの？誰かが来たって、銃刀法違反の証拠はどこにもないな」

「えっ？」

彼らが振り返ると、天音はすでに何も持っていない。丸腰だった。さつきまで、凶悪な武器をもっていたのに、いつの間に、どこへ片付けたんだ…？

田山以外の女子は混乱し、男子は沢口を放り出して、天音を取り囲み、無言で田山に指示を仰ぐ。

「…可愛がつてあげて？」

田山は微笑みながら命じた。しかしその数秒後…

「ぐえっ！」

男子達が聞くに堪えぬうめき声をあげて、床にへたりこんだ。さ

すがの田山も青ざめる。

「今、私が刀を抜いたのにも気がつかないなんてね。まあそれが人間というものだけれど」

この2、3秒の間に、一瞬で彼らの急所を突いたというのか。

「ばつ、化け物……!!」

残った二人の女子が逃げ出した。

「ちよつ、あんた達……!!」

「ばいばーい」と、天音は手を振ってのんきに見送った。

「……これで、二人だけだねえ？」

「……っ！」

「でも、私はあんたにどうしようもないという気はないよ？言っておきたかっただけ。私はあんたなんか怖くないんだって、知ってほしかったんだ。……じゃあ」

天音はそれだけ言うと、呆然としている川口と、気絶している男子達と、怒りに震える田山を残して、鞆を背負って悠然と立ち去っていった。

第1節 桜花高校入学式（後書き）

最悪。

沢口と川口を間違えるなんて、最悪。

第2節 悪夢の再来

- あいつ…死ねばいいのに!!!

田山の思いが、とんでもない連続殺人事件を引き起こす。

「お前、バカなことしたよな…」

(なんでよ。当然のことしただけじゃん。なんでいけないの)

「俺はお前の為に忠告してやったのに。これからお前、大変な目に遭うぞ」

(何？私は何時間後に死ぬの？笑わせないでよ)

「ほら、もう目の前にいるぞ。あいつ、お前を襲ってくる」

「…えっ？」

目の前の工事現場で働いていた作業員が、作業を放り出し、突然ナイフを出して天音に駆け寄ってきたのだ。天音は驚いて身をかわして駆け出した。しかし…

「追いかけてくる!?!?!」

その男はなおもナイフを振り回して追いかけてくる。その後ろから、正気を失った作業員を、ほかの作業員が取り押さえようとしている。

「誰か警察を呼べ!」と怒鳴っている声が聞こえる。

「…どういうこと?まさか、これが…!」

「…そうだ。田山の復讐がはじまったぞ」

「…あいつ!こんなことで、殺人をする馬鹿なの?」

- だから言ったのに…なんらかの原因で心を病んだ人間が、普通じゃない力を手に入れたらどうなるか。最初は戸惑い、だんだん使いこなせるようになってくると、途端にそいつは王様気分になる。誰も自分に逆らわない。周りが自分に従う現実を目の前にして、そいつはすっかり傲慢になる。

田山に嫌われ、死を願われた人間は、本当に24時間以内に死亡する。お前の場合、死などありえないが、やたらと俺を出して防衛したら、正当防衛の前に銃刀法違反で捕まるだろうな！

(はあっ！？っていつかなんで刀が日本の法律まで知ってるわけ！？)

- お前が出席していた「授業」というもので習ったじゃないか！
(刀って人の話をおとなしく聞いていられるんだ…じゃなくってここにいたら面倒だ、さっさと「あかる」に帰る！)

突然の出来事で興奮していた天音だったが、施設に帰り着いてからは、頭がゆっくりと冷静に回転をはじめた。

ナイフを振り回し、こちらに駆け寄ってくる男。

- 目が合ったとき、あの目は正気ではなかった。

あれが、殺人鬼 …

もしあの狂気の源が、瑠火が言っているとおり田山華の能力の影響なのだとしたら、そいつは哀れな話だ。私にはどうすることもできないけれど。

「天音ー？」

間延びした声が聞こえた。天音が顔をあげると、目の前に夢乃の

顔があった。

「どうしたん？もうご飯やで？」

「ああ…もうそんな時間？衿子は今日のご飯何って？」

「今日は牛肉焼いたんやて」

「おいしそうやねえ」

親友の明るい声を聞いて、はじめて天音は安堵することができた。

天音は、物心ついた時からずっと施設で暮らしてきた。指導員の人たちが、天音に里親を斡旋してきたことはあつたが、その度に天音は拒絶した。そのうち、指導員は天音に里親を勧めてこなくなつたので、天音は大満足だった。ここの生活は快適だったし、天音は自分にとっての母親は指導員の一人の伯方衿子だと考えていた。

たくさんの子供たちが「あかる」に入所してきて、また退所していったが、16年前からずっと一緒にいる5人のメンバーがいた。

綾小路夢乃は、天音と同じ年の女の子だ。ツインテールに髪をまとめて、眼鏡をかけている。天音にとっては一番近い存在だ。

水流飛鳥は中学三年で、高校進学のために受験勉強中だ。長い髪をひとつの三つ編みにまとめている。気が弱くて大人しげだが、この飛鳥もまた衿子に懐いている。

瑞島悠里は、天音や夢乃と同年齢の男子である。最初は赤毛の天音を警戒していたが、一緒に生活するうちに彼女と打ち解けている。沢口昇は、後一年足らずで児童養護施設からの退所が迫っている18歳。高校卒業前に就職活動を始めたばかりだが、すでにとある工場への就職が決定している。

彼らは皆、天音の親友だ。そして、天音を含めた彼らには皆、共通した秘密がある。だからこそ、彼らの絆は固かった。

田山の能力は、どこまで影響するのだろうか？自分だけならまだ何とかなる可能性がある。しかし、友達が巻き込まれたらもういけない。その時は、今までハツタリに使っていただけの溜火を…

第3節 誘拐犯の末路、黒幕の消失

楽しい夕食の後に就寝してから、数時間は経っただろうか。天音は、おかしな物音に目を覚ました。起きてあたりを見回すと、ルームメイトはぐっすり眠っている。部屋にも、どこも異常は見当たらないようだ。となると、物音は外から？

- どうやら、「お客さんだ」 -

溜火のつぶやきが聞こえた。彼のつぶやきには、何か邪悪なものが含まれている。

溜火。駄目だよ？

- 一応努力するが、もしもの時にはー…

天音は溜火のぶつくさを無視して、そっと部屋を出た。すると、物音ははつきりと聞こえるようになった。ガチャガチャと、鍵を回しているような音が玄関から聞こえてきていたが、パンツと大きな音がした。扉があげ放たれる音だ。

- 泥棒！

天音は指導員を起こしに行こうとしたが、その目的を達するにはどうしても玄関前を通らなければならない。一階に、男性の指導員が寝ているからだ。しかし、泥棒に鉢合わせするのも面倒だ。ならどうすればいい？天音は迷いに迷って、ついに階段を下った。がー…階下には、天音が考えていた最悪のパターンが待っていた。

- 「青咲天音か？」

知らない男がどうして私の名前を知っている???

「黙っているってことは、そうなんだな。…捕まえる！」

ものすごくひそやかな、しかしはつきりとした男の命令で、部下と思われる男達が階段を上ってきた。天音は上に逃げようとしたが、足をつかまれて引きずり倒される。天音は、溜火を出して斬ってやるのかと思っただが、思いとどまった。

- もし施設の皆に知られたら？

その思いが、とつさの反撃を思いとどまらせたのである。天音がそうして考えを完結させた瞬間、彼女は殴り飛ばされ、意識を失った。

天音が再び目を覚ましたのは、廃墟の中だった。天音は片腕に手錠をはめられており、手錠の余った枷は、デスクの足をはめていた。人の気配がして、そちらの方向を見ると、男達が邪悪な笑みを浮かべて天音を見ていた。気持ちの悪い、撫でまわすような視線が突き刺さる。男達の後ろには…

「お前…!!」

「お前じゃなくて、田山華っていう名前があるのよ。あなたは分かっているよ。だからこの際教えてあげるわ。私に逆らった奴の末路を」

その言葉がまるで会図であったかのように、男達が天音を囲む輪をせばめてきた。彼らが何をしようとしているのかは明白だった。

「心配しないで？あなたのお友達も、すぐあなたと一緒にになるわ」
「…うっさい」

(外に誰かいるのかっ!?)

コンクリートや木材の破片が降ってきた。何故か、破片のひとつひとつが燃えている。踊り場の窓ガラスが割れて、太い触手のようなものが押し入り、華の体に巻きついて体を拘束した。それはまるで、巨大な生き物の尻尾のようで…

(まずいつ!)

考え込んでいる暇はなかった。上から天井そのものが降ってきたからだ。天音は天井を斬り裂いて空中を舞い、「見た」。

体全身から光を発する、巨大な何かを。そして、天音の背丈ほどもある金色の目を。華がどうなったのかなど、考えたくもない。

巨大な何かを見た瞬間、天音はいきなり全身にしびれが走ったように思った。体が動かなくなり、そのまま転落がはじまる。意識も薄らいでいく。

- 駄目、だ…落ちる!-

第4節 記憶の欠片

問答無用、ただ空っぽの自分を満たすためだけに人を斬ってきた日々。

- 殺さないで、死にたくない、まだ生きたいと、彼らは泣き叫んでいた。

もう、あのような日々には二度と戻りたくない…

「お前は、多分これからその欲望が満たされることはないだろう。斬っていても自分が辛いだけだ。それとも、お前には心がないのか？」

- ある！だからこそこうして話せている！

「ならば、「守るために斬る」と考えたことはないか？」

守るために、斬る…？

「そうだ。お前は、私の先祖が造ったのだろう？なら、私達を守れ。お前の本来の役目は、人を斬ることじゃない、妖を斬ることだ！」

何故。

何故、目の前に魔物が迫っているというのに、彼は冷静でいられるのか。

何故、人ではなく妖に対して、「斬りたい」と思ったのか。

それは、本来の私が、「降魔剣」であつたからに他ならない。そして彼は、私とその魔物を退治してくれると確信していたのだ…

彼は、私の本来の役割を思い出させ、私を、殺人衝動から解き放つてくれた。

だから私は誓つたのだ。芽生えた自我と心と、もつ力全てを使つて、蒼崎の子孫を守ろうと。

死なせなどしない。絶対に、死なせない。

「…？」

目を覚まして、まず見えたのは白い天井だった。薬の臭いがする。横を向くと、夢乃が椅子に座つたまま、こっくりこっくりと頭を傾けて居眠りしていた。

「あれっ…夢乃！？田山は…あれは…！？」

「ん？起きたあ…？」

夢乃は、危うく壁に頭をぶつけるところだったのを、背筋をまっすぐに立てて回避し、怒つた顔つきで、天音を見た。

「もう！心配したんやで！泥棒には入られるわ、天音は誘拐されるわ、衿子が半狂乱になるわ、本当に！」

「…心配してくれるの？」

私は、田山を殺す為なら、さらわれたコトも幸運だったかもしれないとさえ思っていたのに。夢乃は、何か知っていただろうか？同じクラスではないが、田山のことは噂程度には聞こえているだろうか？

「…田山に、狙われてるんだってね」

「…知ってたの？」

「さつきから疑問形ばつかやん。…知ってたよ。噂で聞いた。田山は、一度思ったことを現実世界に実現させる能力があるんやっつてもな、そこでうちが疑問に思ったこと言っつてあげようか？」

「…田山に「死ねばいい」って思われた人が死ぬって言うんなら、なんで天音は死んでない？」

「…何？私に死んでほしいって？」

「…ううん、そういう意味ちゃう！ただ天音だけが、田山の能力の影響を受けていないとしたら、何か天音にも事情があるんかなって…」

実は、事情は大ありである。

影響を受けていないのは、瑠火がその刃によって彼女のピンチをぶった斬っているからだ。しかし、天音にどうしてそんなことが言えようか。

「…私にも、秘密はある。夢乃にも言えない秘密はある。けどさ…探られるんは嫌いや」

「ごめん、あの…」

「気にすんな。…後どのくらいで退院できるって？」

「お医者さんは、奇跡的に軽い傷だから、そう長く入院する必要はないって」

「…そうか」

面会時間の終わりがやってきて、夢乃は帰って行った。

影響を、受けていないわけがない。受けていないのなら、あんな死地に追い込まれるはずがない。天音は、沈んだ気持ちを振り払うように、小机に置いてあったリモコンを手にとってテレビをつけた。ニュースキャスターが、切迫した表情で、新たなニュースを伝えている。

「えー、京都府の宇治市で、奇怪な連続殺人事件が起こっています。誰が容疑者なのかもわからない状態です。」

被害者は三十人以上にのぼり、それぞれが、全く違う手口で殺人鬼に襲撃されています。京都府警によりますと、共通しているのは、被害者の証言の中で、殺人鬼が「赤い目」をしていたということで、府警はこれを暴行を受けたことによる精神的ショックとみなし……」

「……これって……」

- 精神的ショックではないな。

「全部、田山がやったって言うの!？」

正確には、田山の能力の影響を受けた人間が、標的（お前）が見つからないので暴走したんだらうよ。

でも、いくらなんでもやりすぎ!私を殺したいからって……

- あっちも、最初はすぐに片付くだろうと思っていたらしい。連続殺人を計画していたとは思えない。

……っていうか、田山って生きてたんだ?あの後どうなったの……?
- 俺にもわからん。ただ生きてることだけは確かだ。

……

「……どうなってるの?」

独り言のように呟いた華。いつもなら、その部屋の中にいるのは華だけである。てつきり、自分は死んだと思っていたのに。

なんで、生きてるの?

死ぬると思ったのに、父さんと母さんのところに逝けると思ったのに。

しかし、数秒後に華の脳内から、物思いが吹っ飛ぶことになる。

「ええっ!?誰こいつ!」

華は確かにベッドにあおむけに寝ていた。しかし、華の腹の上に誰かの頭がのっかっている。どうやら、ベッドの傍らに座っている

うち、眠ってしまったらしい。そして華の右手は、その男性の左手に握られている。

「ちよつと！離してよこの変態！」

その瞬間に男は吹っ飛び、床に尻もちをついた。思念実現能力が効いたのだ。

「その様子なら、もう元気だな」

かなり痛かっただろうに、そんな様子はみじんもなく、男にはあつと笑った。

「…あれ？」

華は、自分の頭に手をあてた。一体自分はどうしたというのだろうか？

会ったこともないし、見かけたこともないはずなのに、私はこの男を知っている？

「…あのさ…もしかして、どこかで会ったことあるかな？」

気が付いたら、華は自分でも間抜けな質問をしていた。

「！」

男は弾かれたように立ち上がり、急いで訪ねた。

「覚えているのか！？」

「え？」

「俺の名は、アスタ・セルトウーナ。他にも何か思いだせないか！？」

「えつと…ごめんなさい。会ったことがあるような気がするけど、思い出せない」

なんだか申し訳ない気持ちになって、華は謝った。

謝る…私が謝るなんて、何年振りだろうか。申し訳ないと思うなんて、何年振りだろうか。

どたばたすぎる

アスターが突然自分の家に押し掛けてきてからいろいろなことが起こった。

まず強姦されそうになった。華は一時怒り心頭でアスターを蹴り転がしていたが、その生命力の高さに感心してもいた。何しろ、蹴つても蹴つても、数十分後には回復しているのだから。

これも妖の強さだろうか？と華は思う。

「あのさ、アスター」

「んん？」

「私とアスターが会ったことがあるとか言っていたわね。私はちつとも覚えていないんだけど、どこで出会ったの？」

「えーっと、フランス」

「…おちよくってますー？」

「本当だよ！…覚えていないから仕方ないか。でもおかしいな…」
「何がよ？」

「客観的事実として聞いてくれ。確かに人間は、前世の記憶は覚えていない。だけど、君は違ったんだ。今「田山華」として転生する前までの君は、一貫して「完全記憶能力」という力を持っていた。だから、前世の記憶として、数枚の「映像」と、アスター・セルトウーナの顔と名前と情動だけは覚えていてくれた。だけど、それゆえにいつも君は病弱だった。

人は、普通140年分の記憶を脳に保存できる。前世の君は、その前の前世の記憶だけで2年分ぐらい記憶の保存容量が減っていたから」

「2年分…大したことないんじゃないかしら」

「それだけでも人間にはけっこう負担で、体調にも影響するんだ。

まあ、それだけで記憶能力には影響しなかったけど。転生する度に、君は前世の記憶を少しだけ覚えていた。転生する前の前の記憶は忘れていくけどね。だから、僕は嬉しかったんだ。…あいつが現れるまでは」

一瞬だけ、アスターの瞳がガチンとスイッチを切り替えたように凍る。唇が、殺意に笑みを浮かべる。

「僕が、人間の女を追いかけまわしていることをよく思わない魔術師がいた。転生していく君の魂を追いかける僕を、あいつは追いかけていた。」

奴らにとっては、ドラゴンは邪魔だったのさ。そして見せしめに、前世の君を、魔女として処刑するように仕向けたのもあの魔術師だ。しかも奴は、処刑の前日、君に「忘却の呪文」をかけた…」

「だから私は、あなたが誰なのか最初わからなかった、って完結させたいわけ？」

華は馬鹿らしくなって言った。

「あのね、貴方が言っていること、やっぱり信じられないわ」

「なんでだ！」

「もちろん、貴方がドラゴンだっていうことは信じるわ。けど…話があんまり現実離れしているんだもの。転生とか、魂とか、そんなのオカルトの分野でしょ？」

華は自分でも、いつも通りの田山華に戻っていることに気が付いた。そのことに少しだけほっとしていたが、そんな華の嘲りに気付いた彼は、

「じゃあ、もう信じてくれなくていい。それに、僕はいない方がいいかも」

哀しそうな声が、「いつもの華」を吹き飛ばした。

「えっ…」

「これ以上、君の日常が壊れることを、君は望んでいない」と、彼は立ちあがって、どこかへ行こうとする。どこまでもどこまでも、哀しそうな笑みを浮かべて。

「どこに…」

「帰る」

その瞬間、華は自分でも信じられない行動に出ていた。何の小細工も使わず…自分の手で、彼を引きとめた。彼に、後ろから抱きついたのである。

「離せ」

「…あのさ…私は何も覚えていない、と思うけど、もしかしたら
以外と覚えているのかもしれないわ」

「…」

「さっき言ったことは嘘じゃないのよ？だけど…あの、その…」
今まで言おうとしたことのない一言を一回言うだけなのに、華は焦ったように言葉を空回りさせてから、ぼそぼそと呟いた。その呟きは、アスターにはつきりと聞こえて、その一言が、自身の脳内の何かをぶつつんと切断するのを彼は感じる。

・間違いない。この焦ったような感じは、「あの人」そのものだ。覚えていなくても、性格が変わってしまっても、今後ろに抱きついている少女は、彼が恋慕していた女性そのものだ。

第1節 石川悪四郎の息子、牙をむく

15年前。京都には、ひとつの有名な寺があった。

繁国寺、という寺だ。

歴史は浅く、明治の文明開化の時期に、国の繁栄を願って建てられた寺は、それからずっと、人々の信仰の拠り所となってきた。参拝する人も絶えなかった。

しかし、その寺は今も存在しない。「あの日」に、僧侶たちは殺され、それから生き残った人々の努力も実らず、寺は廃れていったのだ。

その寺は今も存在しない。敷地だけを残して、建築物だけが消えてしまった。広々とした敷地には、殺された僧侶達の怨みが宿っているとされ、誰も近寄らなくなった。実際、府警直属の「機関」も、繁国寺跡への接近を禁じていた。

ネットの闇の中でひそかに語り継がれる都市伝説によると、寺は今も「迷い家」として、京都のどこかをさまよっているという…

都市伝説は、真実を語っている。何故なら、百鬼夜行の総大将が、その迷い家を勝手に自分のものにして住んでいるからだ。

石川宗樹いしかわむねきというのが、彼の本名。しかし、部下からは「主」とか、「おかしら」とか、ボスであることを現す呼び名で呼ばれていて、本名を呼ばれることはない。百鬼夜行の主であるため、もちろん人間ではない。

彼は今、畳であぐらをかいて、目の前に並べられた複数の写真を眺めていた。

「ほおう…美味しそうな生き肝をもつていそうな能力者ばかりだなあ…」

京都を制圧できるほどの力を得る為には、霊能力や、超能力をもった人間の生き肝が必要だ。陰陽師どもに保護されるまえに、彼らを奪わなくてはならない。全ては、15年前の父である石川悪四郎の敗北を挽回し、人間どもに復讐するため、そしてもう人間どもに侵略されることのない、永遠の楽園を造るため。

宗樹は、さっそく部下を呼んで、命令を下す。

平和だった天音達の日常が、ぶち壊されようとしていた。

…

5日ぶりに、彼女らは学校に登校していた。青咲天音と田山華は、お互いの生存に驚きながらも、たがいに口もきかずに自分の座席に座る。不幸なことに、天音の座席は田山のすぐ前だ。田山の取り巻きは、華の様子がおかしいことに戸惑い、田山に近寄っていくことができずにいた。

微妙な空気の中、先生が教室の中に入ってきた。

「今日は、転校生の紹介をします」

この一言で、湿った空気が吹っ飛ぶ。

「誰っ!?!」

「男!?!女!?!」

「はいはい、皆さん静かに!はい、入ってきて」

転校生が入ってきた途端、天音と田山を省く女子が黄色い声をあげた。転校生は女子ではなかった。何より、日本人でもなかった。

天音は何とも思っていないが、田山は肝をつぶした。

(あいつ…っ！昨日のっ…！)

田山にとっては面識のある外国人…アスター・エルトウーナが、転校生として学校にやってきた。田山は急いで彼から目をそらし、窓ガラスの向こうを凝視する。

「新しい転校生の、アクス・サミュエル君です。サミュエル君は、両親がアメリカから転勤して、日本にやってきました。彼は日本語をちゃんと話せますから、皆仲よくしてあげてね」

…天音。

何よ？

- このクラスは異形の受け皿か？

まさかまた妖…？関わりたくないんですけど、本当に。

- 向こうにもバレていることだろうな、俺の存在は。

エ …

「座席は、田山さんの隣です」

一方、田山は、彼の座席が自分の隣であることに愕然としていた。先生にとってはどうでもいいかもしれないが、彼の行動によって、田山の立場は変わってくるのだ。例えば、彼がもし昨日のように親しく話しかけてきたとしたら、皆はどう思うだろう？影で自分がいじめてきた子が、もしかしたら自分の今までの暴挙を、彼に告げ口するかもしれない。

田山は、自分でも気付かないうちに、シャープペンの芯をペキリと折っていた。

何故だろう？何故かはわからないが、そんなことは絶対に嫌だ。イライラする。

…それは、まるで、彼が自分に対して冷たくなってしまっのが…

田山は激しく首を振った。

なら、最初にこちらから突き放せばいいのだ。そうすれば、彼は真つ黒な田山華を知らずにすむ。それでいいんだ。

というわけで、田山は、アスターが話しかけてくるのをずっと無視していた。アスターの顔を見ようとさえしなかった。それで、すつきりするはずなのに。

田山は、泣きだしてしまいたくなるくらい辛かった。

その一方、天音は、屋上に呼び出されていた。そこには、件の転校生が待っていた。

「…何か、用？」

「この姿では、わからないかな。俺はよく覚えている。貴様が華を殺そうとした時を」と、彼は流暢な日本語で言った。

「…！」

瞬時に思いだした。天音は、一度、正体を現した彼に会っている。

「じゃあ、田山を尻尾で巻き取っていったのは…！」

「ああ。華を貴様から引き離すためだ」

「…ちよつと待って、なんだか私が悪者みたいな感じになってない？私は、あいつによって廃墟に誘拐されて、ひどい目にあつたよ。あいつの能力で部屋の中引きずりまわされて…！」

「…！？」

「私がやったことは、正当防衛だ！」

「嘘つけ！」

「嘘じゃない！」と、天音は激昂して叫んだ。

「何も知らない癖に知つたような口をきくな！だいたい…あんたは田山とどういふ関係なわけ？何の義理があつてあいつを庇うの！？」

今度はアクスの方がうるたえた。

「話しても信じないだろうよ。それに、君に話す必要がない」

「信じない…？それは、違うな。だって、あんたの正体も分かっている」

「！見ていたのか…」

「あれを信じた時点で、これ以上何を否定しなきゃいけないのかな？」

「……………」

「だけどさあ、田山は人を苛めているし、人を殺しているんだってことを、あんたも知っておかないといけない。それでも、あんたは田山を庇う？」

「……………」

田山は、早々に学校を早退していた。脳内で渦巻く感情に耐え切れず、仮病を使ってしまって、今はとぼとぼと家路をたどっていた。何よりシヨックだったのは、華に対する取り巻きの態度が、いつもよりよそよそしかったことだ。

何を泣くことがある？

友達なんて、所詮そんなものだ。今日は、華自身も情けなくなるくらい、感情的になってしまっている。一体どうしたというのだろう？

家に帰って、早く寝よう。再び目覚めたら、昨日と今日のことは夢だったって思うかもしれない。そう自分を励ましたところで、華はふいに寒気を覚えた。

夏なのに寒い。しかも、まだ昼なのに、段々空が暗くなっていくような…

腹が減ったぞお…

欲しい…生き肝が欲しい… -

・おお…ちよつどそこに女がいるぞお…

見たこともないぐらいおぞましい化け物が、じつと華を見ていた。

第2節 さあ、戦いを始めようか

「な、な…え…!？」

華は、目の前に一体何が立っているのか、一瞬だけ理解することができなかった。テレビで見たような、何かの本で見たような、化け物が、リアルな世界に立っている。

「どうして…」

今までの人生で初めて、華は我が身の不運を呪った。

どこから…どこから間違えたの!? イジメをやった時から? 青咲天音を殺そうとした時から?…そうだ、きつとそうだ…あの女に出逢わなければ、私は、こんな化け物に追いかけられずに済んだのよ! どうすればいい、どうすればいい? このままだったら私は間違いないでなく殺される…

消えて!!

華の能力が敵にぶつけられる。三匹の姿の輪郭が、激しく揺らいで、まるでズームアウトするように消えた。華の能力ねがいどおり、本当に体が消えたのだ。

「……………」

自分の能力の効力を知っているのに、華はまだ安堵しきれない。本当に、彼らは消えたのか。まだどこかに隠れているのではないか。

華の不安がまた的中した。商店街の影、建物の天井から、数えきれないほどの化け物が下りてくる。

嫌だ、全部消えて、消えて消えて消えて消えて消えるおおおおお
おおおおお!!!

「どうして、避けた？」

一方で、アスターの声は微妙に平坦だった。

「それは、私がアスターと親しくなりたくなかったから…友達になつたら、アスターは嫌でも、私の本当の姿を知ってしまうだろうから…私は、醜いの。人を苛めて、人を殺して…この力があつたせいで、私は、私でなくなつたんだ。

それ、に…私は、貴方を、殺してしまうかもしれない…」

「どうして、そう思う？」

「だって…殺すつもりもなかったのに、殺してしまったことだつてある…私の両親だつてそうだった…」

「君の過去については、後でゆっくりとお聞かせ願おうか」
アスターは、ぐんと高度をあげて、華の家を目指した。

「天音。来るぞ！」

！

その時天音と夢乃は、教室で授業を受けていた。

「先生！トイレ行っていいですか？ちょっとおなか痛くて」

演技をしているのも時間が惜しかった。許可をもらうと、天音は
そうそうに屋上への階段を目指す。が

「おいそこ！」

何も知らない生徒指導の先生の邪魔が入った。

「トイレはあっち、さつさと授業にー…ぐえっ!？」

何も知らない先生は、窓ガラスをたたき割って入ってきた何かに首もとを噛みつかれる。牙が声帯まで達したのか、先生は自分に何があつたのか全くわからないままに死んでいった。天音は、一瞬目の前で起こった出来事が理解できなかつたが、自分にもその「なにか」が向かってきたのを見て一刀両断で斬り捨てる。

生徒全体がパニックに陥るのに、そう時間はかからなかつた。

天音は、急いで夢乃がいるはずの教室に駆け込む。クラスメートのことなどどうでもいい、ただ共に「あかる」で暮らしてきた、夢乃が心配だった。

夢乃は、無傷で済んだわずかなクラスメートと肩を寄せ合って集まっていた。彼らの周りを、金色の結界が取り囲んでいる。それを、教室の天井にも届くゲールが破壊しようとしていた。何度も何度も結界にタツクルして、結界を壊そうとしている。

天音は駆け寄って、刀を振るってゲールの懐に斬りこんだ。しかし相手もそれぐらいで倒れるような相手ではない。起き上がって、天音をターゲットにして襲ってきた。天音はまた刀を振るって、ゲールを真つ二つにする。

「すごいねえ、青咲天音！だが、所詮は「真羅刀」のなりそこないだ」

若い男が、窓ガラスに腰かけていた。少女を抱きかかえている。少女は頭から袋をかぶせられて、顔は見えない。

「…百鬼夜行の、総大将？」

「そうだよ。私は石川悪四郎の息子、石川宗樹。…またの名を、酒天童子。君は、歴史の教科書ぐらいは読んでいるだろう？」

「もちろん。…だけど、その総大将様がしがない学校に何の用なんだ」

「かつて私は、源頼光を頭とする四天王によって、死んだも同然の窮地に追い込まれた。あの時、私から霊力を徹底的に奪い去った降魔剣を…青咲、貴様はその手に握っている」

「!？」

瑠火が、酒天童子を斬ったの!？」

「まあ、そうだな。記憶はあるが、その時俺はまだ自我を持たなかったからなあ…」

「まさか、降魔剣がその後に入殺しに使われて化けるとは思わな

かったがなあ。それでも私にとって、貴様が脅威であることに変わりはない。しかし…貴様だけを殺すのは物足りん。昔のように、女子を頂いてゆけば、お前も少しは心を痛めてくれるか？」

「！」

「この女…確か、水流飛鳥といったな」

「！！！！！」

何故飛鳥がここで気を失っている？今頃飛鳥は、学校で真剣に授業を聴いているはずなのに、どうしてここで、制服のままぐったりと敵の腕の中で眠っている？

「聞こえてるんだらう、溜火。よく覚えておけ！貴様の心を徹底的に壊しつくし、もとのような殺人鬼に引きずり戻してやる。そうしてその女の自我も消えてくれたら、調味料としては最高だ」

「…させない。そんなこと」

天音はとつさに斬りかかる。酒天童子はひらりと教室の窓から離れて、空中に立つ。少女は気を失ったままだ。天音も空中に降り立ち、二人が対峙する。

はつきり言つて、天音は酒天童子などどうでもよかった。刀で彼をけん制して、ただ飛鳥を助けようとして手を伸ばす。が…

「まずお前の相手は、本物の真羅刀だ」

横から第三者の攻撃が来て、天音は一瞬で身をかがめた。避けることはできたが、額から鮮血が散る。

「紹介しよう。彼は私の百鬼夜行の一人、闇の真羅刀だ」

黒く長い髪を伸ばしっぱなしにした、黒服の男。

男の瞳は、人間のものではなかった。獣のような目で、天音を睨みつける。天音が彼に気を取られている間に、酒天童子は姿をくらましてしまった。

「…いいじゃない。やってやるよ！」

天音は薄く笑って、刀を構える。

次の瞬間に、
橙色の光と漆黒の間が
激突した。

第3節 怖いのか怖くないのか

窓の外で起こっている光景を、夢乃は呆然として眺めていた。夢乃の視点からは見えていなかったが、町の各地で、異能力者が、妖に襲撃を受けていた。

夢乃が造りだした結界の中には、生き残った五人のクラスメートが残って、恐怖におびえている。誰ひとり口をきかない。気絶している者もいる。夢乃を含めた彼ら以外は、皆、結界の外で傷を受けて倒れていた。生きているのか、死んでいるのかもわからない。

結界術を夢乃に教えてくれたのは、15年前、まだ赤ん坊だった夢乃を助けたという陰陽師、土御門興亜だった。安部清明神社の神主にして、京都府警直属退魔機関に属している、警察関係者だ。妖が出没している今も、彼らは出勤しているのだろうか。

「…この窮地から、救い出しに来てくれるのだろうか？」

結界術は、防御だけでなく、攻撃に応用することもできる。結界は自由に変形できるからだ。形を変形させて圧縮すれば、飛行することも可能だ。興亜が使役する式神に憧れ、弟子にしてほしいと再三頼んでいた夢乃に、彼はこの術を教えた。

だから夢乃は、その気になれば天音の援護をすることもできる。しかし彼女はその場から動くことができない。

だって、あんなに殺気が満ち溢れる天音は見たことがなかったから。

だって、夢乃が動く時は、クラスメートを守っている結界を一旦解除しないといけないから。

なぜって、初めてのこの状況に怖くなったから。

次々と理由が浮かんできて、夢乃の本能が動くことを拒否する。

そのとき、ドン、と音が聞こえてまた建物が激しく揺れた。先生たちがどうなったのかなど考えたくもない。生存者たちがおびえたところで、またドンと建物が揺れた。

突然気がついた。誰かが、自分たちがいる階に近づいてきている。

斬りかかる。刀と刀が力をぶつけ合う。

男の体からにじみ出る黒い影と、女の体からにじみ出る赤い炎が、破壊と再生を繰り返す。男が己の技を出すまでに時間はかからない。

黒い影が、天音の死角から足に絡みつき、敵を剣で押していた彼女を同じ立ち居地から引き摺り下ろした。まるでボールのようにはるか下の地面に向かって放り出されたところを、すぐに姿勢を立て直してそこから天音は反撃を開始する。

敵に向かつて、刀を軽く振っただけだ。それなのに、異常な風圧が起こつてまっすぐに襲い掛かっていく。敵は無言でそれを弾いて、攻撃は拡散されて空に散つたり、ビルに激突してそれを破壊したりした。

「何故人間のお前が真羅刀の技を使える？…お前は溜火のようで溜火ではない。何故人間のお前が正気を保っていられる！？」

「どうでもいい、そんなこと…今はただ、飛鳥のところに行きたいの。どうして私を邪魔するかな」

「私は石川悪四郎の遺志を継いでいる。その遺志を、人間どもにつぶされるわけにはいかん！」

「…どうでもいい」

背中の中の二つの個所から、翼にも似た炎が噴き出し、制服に二つの穴を開ける。天音は額に手をやり、目を閉じて、やれやれというふうに首を振った。

「誰もかれもが、私の日常を邪魔する。私はただ、普通に暮らし

ていただけなのに、普通に平和な生活を満喫していただけなのに、
どうして邪魔をするかな」

けだるげな彼女の背中で、炎が翼のように閃いた。「困ったな」
という表情で、天音は目を開く。その目は、ちっとも困っていないか
った。炎と同じ明るい橙色の瞳が輝いていた。

「できれば、私を舐めないでほしいかな」

「…貴様の素性についてはいまだに疑問が残る。しかし、本物
と同じくらい強いのなら…こちらもレベルを吊り上げるしかないな」
黒狼の背中から黒い翼が生える。正確には翼ではなく、闇と影の
塊が、まるで翼のように彼の背中から二つ、生えてていた。

「貴様にわからせてやる。偽物と本物の力の差を」

…

教室の中で、夢乃達はすくみあがって結界の中で身を固めていた。

吐き気を催すような臭いが鼻をつく。天井に頭がこすれるぐらい
巨大な、化け物。アニメやホラーものの映画でしか見たことがなか
った、化け物が、ついさっきやっとな爆風を生き延びたばかりの生存
者に牙を剥いていた。

あまりのことに、夢乃以外のクラスメートが泣き出した。母親を
呼ぶ声、家に帰りたいという泣き言、それは夢乃のつきざるいら
らのもととなった。

「うるさい！」

突然の一喝に、彼らはしんと黙り込んだが、それでもすすり泣
きはやまない。

「あんたら、自分の身は自分で守れ」

夢乃は、クラスメートの服に次々とタッチしていく。彼らの服に「霊装」を施した。

「これで、あんたらはもう化け物に殺されたりせえへん。今からあいつがあんたらに触れたら、あいつは死ぬ」

「え…？」彼らは混乱した様子で夢乃を見る。

「今うちがやったのは、「霊装」って言ってな、ようするにあんたらの服に結界をつけさせてもらったんよ。その結界は、うちが「異常なもの」だと認めたやつは、徹底的に攻撃を反射する。敵の攻撃が、敵に返るってことだよ」

「…??でも…」

「ええい、論より証拠、だったら実際にあいつに殴られてみる！」
そう言つて、夢乃はクラスメートの一人を結界の外に放り出した。放り出された同級生は、その瞬間に魔物に殴り飛ばされ…なかった。

「ひいいっ！……って、あ、れ…？」

逆に、彼を殴った魔物が、逆方向に飛ばされ、その体が壁にめり込む。

夢乃の結界術に勇気付けられて、彼らは最初はおそろおそろ、途中から全速力で廊下に駆け出した。一番最後に、夢乃が教室から脱出したが…

「あつ…!？」

起き上がった魔物に足をすくわれて、彼女は地面に倒れこむ。窮地を潜り抜けた彼らは、後ろを振り向かず廊下の角を回って消えていく。

足がそのまま持ち上げられて、逆さづり状態になった夢乃は、目の前に出現させた結界を瞬時に鏝に変形させて反撃に出る。

第4節 ただの人間になりたい

華は、自分のベッドでぶるぶる震えていた。

ついさっきまで、自分が殺されかけていたことを認めたくない自分がいる。ついさっき、アスターと名乗る男に助けてもらったことを素直に受け入れたくない自分がいる。その一方で、アスターをヒーローのように思う自分がいる。

「あなた…どうして私を助けてくれるの？」

青咲天音から聞いたんでしょ？私が裏でどれだけ汚いことをしていたか。当たり前のように、人をいじめて、殺してきたのに…どうして、まだ助けてくれるの!？」

「…君のその厄介な能力については、心当たりがある。僕は、まだ君が田山華ではなかった頃の君と、君の頭に細工した魔術師に会っている。僕は、君の魂の匂いと、君を廃人同然にまで追い込んだ魔術師の匂いを追って、日本に来た。…でも、今の君にいくら話しても、君は信じてくれないんだろうな」

「…？田山華では、なかったころ…？」

「今の君の頭が理解できるように言うと、前世の君のことだ」

「前世…？まさか、そんなのあるわけ!？」とところがあるんだよ」

神も仏も実在する。それこそ天界に、何百人もの神が住んでいる。前世も存在している。人は、一生のうちに成した善事と悪事で、次の転生先が神仏によって決められる。悪人だったものは、動物や魔物として生まれ変わるし、善人だったものは自分が望むように生まれ変わることができる。

そして、アスターは…

「君の言つとおりだ。あの日の廃墟で、彼女とは初めて会った。その時、彼女が君を殺そうとしているように思えたんだ。そうなるまでのいきさつを知ろうともせず、僕は彼女を一方的に敵と決めつけ、誰にも知られないうちに殺そうと思った。」

でも、彼女の口から真実を聴いて気が変わった。だからといって、華、あの時殺されかけた君を見捨てることはできなかった。もしかしたら、あの時君は、僕の背中にあるものを見てしまったかもしれない」

「あの時、アスターの背中に…翼が生えていた。こうもりの羽のような。アスター、あなたも奴らと同じような化け物なの？」

「…そうなる、んだろうな」

化け物と言われた瞬間、アスターは哀しそうな笑顔を浮かべて返した。

「だけど、知っておいてくれ。僕は決して君をとって喰うようなことはしない。こんなこと言うのは照れ臭いけど…君を死なせたくないんだよ」

「…あなた、本当に私を信じているの？疑ったり、しないの？わ、私は…思ったことが本当に実現する力があるの。その気になれば、あなたをどうにでもできるんだって…」

「君は、そうしない」

「どうしてそう言い切れるの？」

「記憶は消えても、情動は残っている」

「…意味がわからない」

「僕にその能力を使うことを、君は嫌がっている」
アスターが言ったことはまさに凶星だった。

なんなら、こいつを奴隷にしてやろう。

そんな思考が完全に脳を支配する前に、別の思考がその思考を打ち消す。

嫌だ。

華は、初めてこの能力が鬱陶しいと思った。

超能力をもっている。ただそれを証明しただけで、人から羨まれた。自分はただの人間じゃないんだという思いは、いつしかおごりに変わり、華を変えてしまい、華に殺人をさせた。

しかし、今その思いは華の心にはない。

人とは違う能力を持ったって、ちつともいいことなんかなかった。

こんな簡単に、人を殺せる能力など、「要らない」

ばきんっ

華の頭の中で、何かが壊れる音が響いた。

第5節 その為ならなんでも殺す

夢乃は半分泣きながら、無我夢中で敵を刺した。細かい雷のようになつた結界の変形物が、魔物の体を何度も貫く。魔物がとうとう動けなくなつても、何度も何度も魔物を刺し続けた。魔物が、塵と化して空気に溶けてしまうまで。

「は…あ、あ…！あ、ぐっ…」

敵が消え去つたことを確かめた夢乃は、へなへなと座り込み、泣きだす。床に嘔吐物が飛び散つた。できることならこの恐怖と悲しみも吐き出してしまいたかつた。

「…怖いかな」

人間の声が聞こえて、夢乃は反射的に振り向いた。

めちやめちやに破壊された教室の廊下。夢乃のすぐ後ろに、青年が立っていた。

「…興亜、さん…」

「気配に気づかないのはまだ未熟だったな。私が魔物だったら、ほんの数秒前にお前はひき肉になっていただろう」

夢乃は、一瞬、呆けたように、興亜を見上げたが、その時大きな爆音が聞こえて、校舎全体が大きく揺れた。その振動で、夢乃は初めて我にかえる。

「…！興亜さん、助けてください、うちの友達を…っ！天音も、戦つてるんです…！」

「助ける必要はない」

興亜は、夢乃の訴えを冷やかに斬り捨てた。

「どうして…！」

「結界術を会得したお前なら、知っていたはずだ。蒼崎天音の正体を…」

興亜は夢乃を見下ろし、冷やかに睨みつけた。

「覚醒したのなら、何故もつと早く教えなかった！あれに情けは無用なんだぞ！」

夢乃は、興亜の剣幕に、ビクツと震えて彼から目を反らした。

「だって…だって、天音は…さっきの奴みたいに、うちらを殺したりなんかしません…！」

「そういうものが一番危険なんだ。あれは、人間でありながら魔を宿した女だ。いくら無害でも、あの女が妖と人の抗争の真実を知ってしまったら、彼女はその時はじめて、「妖怪」になる」

「…だってっ！」

「あのまま生きていても、青咲天音が辛い思いをするだけだ。あれは使いようによつては人間の「武器」になりうるかもしれないが、それは彼女の体が妖化^{あやかしか}する危険が常についてくる。曖昧な可能性など無用なんだ、綾小路！」

「…できません…でけへんよお、そんなんっ…！そもそも、うちが結界術を身につけようと思つたのはっ…！」

そこまで叫びかけたところで、夢乃ははつと口をつぐむ。

これだけは、口にはしてはいけない。人妖である天音にあこがれて結界術師を目指そうとしたなどと本当のことを言ってしまったら、破門だ。

「思つたのは、友達を助けられるぐらい強くなりたいからでっ…友達を殺すためになつたわけじゃ…」

安倍興亜のビンタが夢乃の頬を直撃した。

「あうっ…！」

夢乃はそのまま壁にぶつかり、ぺたりと座りこむ。

「…それほどこまでに危険人物と慣れあいたいのなら、構わない。ただし、ひとつだけ約束しろ。あれが本当の「闇」に飲みこまれ、真の真羅刀になった時は…お前があれを殺せ、いいな!？」

「うっ…うっ…あっ…」

「殺人二課はすでに動いている。我らの仲間がやってくる前に、

あれはきちんと回収しておくんだな」

夢乃が震えて、呻きながら立ちあがったときには、安倍興亜はすでに姿を消していた。空間移動能力でどこかに移動していったのだらう。

きいいいいいん!!!

黒狼は、少女の鮮やかな剣さばきに一瞬見惚れた。敵意は、少女の想像以上の実力への感心に、そして、美しい炎を纏う少女への憧れに変わる。

炎が、段々青色に変色し始めていた。空気中の酸素と溶けあっているのだ。それほどに、少女が放つ力の純度は高いのだ。

- だからこそ、黒狼は納得できない。

これほどに、少女を美しくさせる「瑠火」が、少女を支配しないでいられることが、理解できない。

そして…

「お前は、どうしてそこまで戦う!? たかが一人の人間の為に… 魔物に憑かれた体でありながら、なぜそこまでして正気を保つ!？」

「…何も私は、飛鳥の為にここまで苦労しているわけじゃないよ」
少女はにべもなく答える。

「私はただ、好きなことをやりたいだけかな。ご飯を食べること、友達と遊ぶこと、何より…平穏な世界で生きること…ただ、私が思っていることを実行したいだけ。いいかな?これは、瑠火の願いでもあるんだ」

「…!」

満足だと言うのか、瑠火。

お前はそれで十分だというのか。

この女を支配せず、この女と共存するというだけで、満ち足りているというのか。

「糞が…瑠火、貴様はそこまで下り下りしたのか!!!」

ありつたけの憎しみを刀に込めて、黒狼は天音に突撃する。黒い闇が、槍のように天音に迫る。

「だから、邪魔をしないでくれるかな」

天音の体を、青い炎が完全に包み込む。それは、黒狼よりも早く、まるで炎のレーザーのように、彼を迎撃した。

まるで、特撮映画のようだった。

夢乃は、窓に駆け寄って、空中の交戦の様子を見上げた。その戦いに、介入などできるはずがなかった。見惚れるだけで、精いっぱいだった。

彼女は炎を纏っていた。その炎は、最初は明るい橙色に輝いていたが、輝きの色が変わり、明るい青色の輝きが夢乃の目を突き刺す。夢乃が眩しさのあまり両手で顔を覆っている間に、全ては終わっていた。

光が消えた後に、空中に立つ二人の立場は、完全に逆転していた。天音が、黒服の男の襟首をつかみ、険しい表情で何かを問いかけている。

「水流飛鳥をどこに連れて行った？」

「…大江山、だ…今も昔も、そこは、百鬼の本拠地だ…」

「…そう」

しかし、黒狼は最後まで悪あがきを忘れなかった。人型をなくし、闇に包まれた刀の姿に還ってでも、溜火を殺したくて殺したくてしようがなかったのだ。

「っ…!？」

- 警戒を解いていたのがいけなかったな、女！！溜火もろとも消えるがいい！！！！

躊躇した天音の隙をついた、つもりだった。しかし、彼の最後の一撃は、第三者によって阻まれる。

黄緑色に輝く、結界の平面だった。

結界が、黒狼の妖気を察知して、徹底的な排除を始める。その上から、天音がとどめを刺そうと刀を振りかぶった。

「…これから、どうするの、アスター」

「君も狙われているから、しばらくは身を隠した方がいい…ん？」

「どうしたの？」

「…君、試しにコップを割ってみて」

「はあ…？なんで…」

華は傍にあったコップに、「割れる」と念じた。しかし

何も、起こらない。

「あ…あれ…？」

「君は…能力をなくしたのか？」

「もしかして、さっき、この能力は「要らない」って思ったけど

…まさか、それで能力自体が無くなるものなのかしら!？」

アスターの顔が、喜びに彩られた。

「これでもう、君は人を殺さない」

そんなに喜ばれても、華は自ら能力を無くしたことになかなか実感が湧かない。

「戻れるのかしら…元の私に。でも…もう遅いのか」

「何が？」

「あなたは単純に私のことを信じてくれるけど、残念ね。私、本物の人殺しよ」

「…その話はよそう」

「どうしてよ。私は本当のこと言っているのよ！」

「君が人殺しをするようになったのは、その能力で間違って両親を殺したからだろ」

「なんで知っているの!？」

「古い日記。読ませてもらったよ。君の部屋をいろいろ探ってたらあつたんだ」

ストーカーのような行動をしているとは分かっていた。

しかし、彼は、天音から全く違う視点の話を聴いた後、華のいない隙に華が住んでいる部屋がある高級マンションに忍び込み、彼女の自室にも忍び込んで、いろいろ探っていた。何か、本当の真実を知ることができる、アルバムとか、日記とか、そういうものはないだろうか？

彼は全ての言語を解読することができる。華が転生するたびに、彼は彼女の魂の転生先を追いかけて、世界各地を旅していたからだ。そうして、彼は見つけてしまった。

彼女が初めての殺人をしたことが、綴られた古い日記を。

例えば親にちょっとした原因で激しく叱られて、怒りと不満のあまり、「死ねばいいのに」と願ってしまったとしたら。その願いを、「思考実現能力」が現実化させてしまったら。

朝起きると、親が二人とも死んでいて、その原因を知ってしまったら。

華はどんなに苦しんだことだろう。

心がどんなに傷ついてしまったことだろう。

「…な、何よ…それが、何だつて、わけ？も、もうあの日から、何年も経った…べ、つに、私はっ…」

「じゃあ、なんで君は泣いているんだ」

「え…？」

華は、半信半疑で目元に手をやった。みると、指先が濡れている。

この私が、泣いている？華にとっては、信じられないことだった。

第6節 覚悟はあるか

「…逃げた、のかな…?」

彼女が纏っていた炎が、薄らいで消えていった。

天音はきよきよと、わざとらしい丁寧なしくさであたりを見回す。目の前にいたはずの男は影も形もなく、ただそこには黒い霞が漂っているだけだった。

「ああ、そう…」

天音は安心したように目をつむると、突然、空中からまっさかさまに転落しはじめた。

「ええっ!?!天音!?!」

夢乃は慌てて円盤に乗って空中を降下し、もうひとつ不完全な圧縮結界を作り出して落下地点に設置する。すると、天音は落下の痛みを味わうことなく、そこに仰向けに着地した。

「大丈夫!?!天音!?!」

「…このぐらいで死なん。夢乃は心配性じゃないかな。奴ら、は…?」

「うちと、興亜さんが倒した!天音:本当に大丈夫?」

「大丈夫…それに…あの子の命まで背負いたくないから、私は…」

「あの子って…何?」

「飛鳥が、連れていかれた」

「誰に!?!」

「…酒天童子。場所は大江山」

返答に対して、夢乃は一瞬ぼかんとしていたが、やがて思い直したように頭をかいた。

「そうやな、こんだけ妖怪見せつけられたら、信じるしかないわな…やけど、あんたまさか…単身大江山に乗り込むつもり?」

「…そんなことしたら、あのチャラ男が怒り狂うで」

「あゝ…あいつか。いざという時に男らしい振る舞いやってくれ

るんか？逃げ出しそうなタイプに見えるかな」

「そんなことないで〜ほら、覚えてるやる？飛鳥って可愛いからさー、よう男が寄ってくるじゃん。その延長で、やらしい男に誘拐された時…」

「あぁー…」

それは、飛鳥が中学2年の時で、まだ記憶に新しい。いつも飛鳥をストーカーしていた沢口昇は、それに気づいて自らの拳で不良に大けがを負わせ、飛鳥の退路を切り開いて彼女を連れ帰ってきたのだ。

「もう、すぐ近くに来ているみたいだ…」

天音は、笑って振り向く。兎小屋の残骸の向こうに、一人の男が、笑顔で彼女らを見ていた。

「夢乃ちゃん、今なんていったかな？」

なんて笑顔で聞いてくるが、その目は全く笑っていない。

「まあ、いいや…それより、天音ちゃん。聞きたいことがあるんだけど」

「…見ていたんだね。私が覚醒したのを」

「君のことは知っていた。知らない人が、赤ん坊だった天音ちゃんを「あかる」に連れて来た時…衿子とその人が話しているのを偶然聞いたんだよ」

それを聴いて、天音は戸惑った。知ってたんだ。

まさかと思つて夢乃を見ると、夢乃も申し訳なさそうな顔で俯いた。

「…知つとつた。やけど、うちはあんたが危険やとか思つてへん！」

「俺も、今のところは夢乃ちゃんと同意見だよ？だけどね…君は、何か目的があつて僕らと一緒にいたんだらうかつて思つてね」

すつと、人差し指を天音の顔に向けて、彼は言った。

「答える。何が目的なんだ。…回答次第では君を殺す」

彼の能力は、相手の精神に干渉して、洗脳したり、幻覚を見せた

りすることだ。時には行動を完全に支配し、自殺行為をさせることで、殺しを行うことができる。魂を持つ者は、皆、精神こころを持っている。よって、彼の能力は魔物にも有効なのだ。

「…何、言っちゃってるのかな？」

珍しく天音がイライラした様子で答えた。そのイライラが、はつきりと怒りのこもった一言に変わっていく。

「何も、目的なんてありやしないって、どうしてわからないのかな？私が戦っているのを見ていたのなら、覚醒したのを見ていたのなら、そこまでの経緯を、理由を、どうして考えようとしなかったのかな？」

…お前はそこまで脳無しなのかよっ！！15年このかた、私がつめえらを殺そうとしたことなんてあるか！？それでも疑うか、私が信じられないかお前は！！！」

昇は、眉ひとつ動かさずに、しばらく無表情で、激昂する天音を見つめていたが、やがて、疲れたように溜息を吐いて、手を降ろす。その顔は、一転して安堵していた。

「ならいいんだ。怒らせてごめん、天音ちゃん」

「……」

まだ無表情で昇を睨みつけている天音に、チャラ男特有の爽やかフェイスで応じる昇を、夢乃はどうして分からずに、おろおろする。

「あ、あのさ、喧嘩が終わったのなら…とりあえず、施設の方はどうなったの？」

「施設は無事だ。夢乃ちゃんが周りに結界を張っていたおかげでな」

「ほ、本当に!？」

施設に戻ると、施設の周りの住宅はめっちゃめっちゃになっていたが、百鬼夜行の残党はいないようだった。そこには、妙な熱気が漂っている。

「悠里」

「よつ、天音」

「あれ、全部悠里がやったのかな？」

「…ううん。沢口が手伝ってくれた。その後から殺人二課の人たちが来て…」

「警察の人たちが、せん滅してくれたんだよ。すごいなあ…」

少し陰った表情で彼らは答えた。「あかる」の周りには、なんとか生き残った人たちや、京都府庁から派遣されてきたボランティアの人達が集まってきて、炊き出しを始めていた。施設から散つていくのは、家屋の残骸から一人でも生存者を見つけ出そうとするレスキュー隊だ。

子供達も、段々落ち付きを取り戻してきていた。指導員も、疲れ切つていながらも、安堵の表情を浮かべて炊き出しを手伝っていた。しかし、そこに一人だけ欠けている顔がある。

学校に行つたまま戻つてこない、水流飛鳥だ。

「俺は飛鳥ちゃんを取り戻しに行く。天音ちゃんも、来たいなら来ていいよ」

「私もっ」

「綾小路は残つた方がいい。また魔物がやって来た時に、ここにいる全員を守るぐらいの力を持っているのはあんたしかいない。僕らだったら、散々動き回らなきゃいけないけど、あんたなら動かずとも守れる」と、瑞島悠里は夢乃を止めた。

「何？悠里も来るの？どうして…」

「え？ああ、僕は…う、うるさいな、なんでもいいだろ、理由なんて！！」と、何故か悠里はイライラした様子で天音の疑問を封じる。それを昇はニヤニヤした様子で見つめていた。

第7節 伝説の迷い家

飛鳥は、見知らぬ暗闇で目を覚ました。一瞬、自分は夢を見ていて、夢から覚めたらただ、「あかる」の自分のベッドで眠っていただけだったという幻想を夢見たが、その幻想は数秒で打ち砕かれた。暗闇の幻想は数秒で霧散し、飛鳥の目の前に現れたのは、見たこともない日本家屋の座敷だった。そこには、飛鳥と同年代の少年少女達が、順序よく並ばされて眠っていた。

「あれ…呪いを、破ったんですか？」

「…！」

目を覚ましているのは、飛鳥一人だけかと思われたが、他にもいたらしい。少女は、壁と壁の隅に座り込み、緩やかに顔をあげた。

飛鳥は、危うく、「うわあ…」と声をあげそうになった。

髪はストレートに腰まで降ろしている。顔立ちは、これぞ日本美人と呼べるのではないだろうか。服装は長袖のハイネック、薄いピンク色のトレーナーに、足首がやっと見えるくらいの黒く長いスカートをはいている。青咲天音がクールビューティーだとしたら、この女の子は大和撫子ではないだろうか。

しかし、大和撫子にしては似合わない一点がひとつだけあった。

その目は、一般人の、普通の女の子の目ではない。

「あなたは…」

「皆さんは、目を覚ましません。酒天童子の…呪いによって昏睡させられていますから。呪いを破れるのは、人ではない魔物か、超能力をもった人間だけです」

「えっと、あなたは…」

嘘だ、と飛鳥は思った。この少女からは、同じ特異な力がある者の雰囲気を感じられない。ならば…

「私は橋本美麗。さっきの説明からあなたが考えた通り、私は人間ではありません。だからこうして呪いを破って覚醒したんです。あつ、でも、だけど、そんな風に警戒しないでください…私は、あなたを食べようとは思いませんから…」

「あ…あなたと同じ人を知つとるから、大丈夫、ですよ？そんな、怖がったりはしないから」

飛鳥は首を振って言った。

「そう、ですか…」

橋本美麗は、少し安堵した様子でまた俯いた。

「それより、ここはどこ？私…」

「ここからは…出られません。あなたの力では」

「どうしてよ！」

「…京都人なら誰もが知る都市伝説を、ご存知でしょうか。その伝説は、ケータイやパソコンなど、インターネット上でも語り継がれていることです」

「…「繁国寺」…？」

「15年前のあの日…石川悪四郎が率いる百鬼夜行が京都市を闊歩し、多くの人間の命が失われました。その時、歴史があり、参拝者も多く、願いを叶えてくれることで有名だった繁国寺も襲撃されました。その事件を契機に寺は廃れていき、取り壊されることになつていたのですが、工事の前日に」

「突然、敷地を残して寺が消えた…まさか！」

「その、まさかですよ」と、美麗は哀しげに微笑んで頷いた。

「ここは、迷い家となり果てた繁国寺。そして、百鬼夜行の本拠地です。私達が脱走しないように、鬼の配下が見張っています」

「じゃあ、何の目的で、私達は！」

「百鬼夜行の力の源にされるんですよ。あなたも含めた、彼らは特に、常人とは異なる力をもったあなたは、奴らの好物です。

…だけど…ご安心ください。そんなことは私がさせません」

「え…」

「私はその為に、妖気を徹底的に抑え、ここまでわざと捕まってきました。…あなた、ここから出たいと言っておられましたね。…ならば、私に協力して頂けないでしょうか」

「ええっ!？」

「協力していただけないでしょうか。死を望まないのならば」

「……」

「無理にお願いしているわけではございません。このまま死んでもいいというなら ……」

「死にたくないに決まってる!分かった…協力するわ」

…

夢乃は、再び土御門興亜の前に立っていた。

「何の用だい?綾小路さん」

興亜は、あの時とは打って変わって柔らかな口調で夢乃に問う。

「あの…酒天童子のことについて、伺いたいです」

「酒天童子…?」

「酒天童子はまだ生きていて、昔に廃れて迷い家になった繁国寺を本拠地に行っているんですよね?」

「そうだよ」

「その迷い家は、今はどこで確認されているのでしょうか?」

「…どうしてそこまで酒天童子のことに興味をもつんだい?」

「友人が…酒天童子に連れ去られました」

「それで、助けに行くと」

段々、土御門興亜の表情が険しくなっていくのが見てとれた夢乃は、心の中でガタガタ震えながらも、勇気を振り絞って、「はい」と返事した。

「…それがどれだけ無謀なことか、分かっているのかい?」

「私では…ありません。私の、友人達です」

「そうか…」

興亜は、ふつと険しい表情を消した。

「大切な者の為に動くというのはよいことだ。まだまだ結界術を完全に会得していない君が敵地に踏み込むというのなら私は大反対だがね。はつきり言って、私はどうでもいいんだ。自分の家族、自分の弟子、自分の友人が安全であれば、無謀な若者がむざむざ自分から敵地に踏み込むことなど」

その発言が、興亜がいかにも冷酷な人間かということを表しているわけではないことに、夢乃は気づいていた。興亜にも家族がいることを、友人がいることを夢乃は知っていた。

「まあ、こんな時に、家族など持つべきではないかもしれないけどね」

興亜はそう言って、迷い家が今どこにあるかを夢乃に教えた。

「今のところ、式神に何度探知させても、迷い家は大江山にあることが確認できている」

「ありがとうございます！」

「君の友人達に伝えてくれ。…死ぬなよ」

「…師匠が定義する、私の友人には、青咲天音も含まれているのでしょうか？」

夢乃の問いに、しばらく興亜は考え込むと、頷いた。

「ああ。一応な」

第8節 初めての死闘

百鬼夜行の魔の手は、ついに華のアパートにまで及ぶ。

「アスター！」

「大丈夫だ！」

防犯対策が施された窓ガラスも、異形の襲撃には役に立たない。ガラスが割れた瞬間に、赤い閃光が華に襲いかかるのを、アスターが弾き、二人は窓ガラスの外に舞った。

「くそっ、数が多い…キリがない！」

「だっ、大丈夫！？」

どうするべきか、華は必死で考えた。寺や神社に逃げ込めば安全だが、そこは、きっとアスターを煙たがるだろう。ならばどこに逃げれば…

（そうだわ、嵐山！あそこならー）

嵐山の寺の住職なら、話を理解してくれることだろう。あそここの寺には、妖怪の「傷」を治す医者も住んでいて、近くの神社では、あの世に逝ってしまった会いたい人の魂を巫女にとり憑かせて会話をするといい。

赤い蝙蝠のような翼を羽ばたかせて、アスターは嵐山に向かった。

寺の住職、天浄法師は、近づいてくる妖気にはっと首をあげた。妖気はかなり大きい。しかし彼はそれでも警戒しようとはしなかった。これまで彼の寺に住む食客は、「ぬらりひょん」を患者にしたこともあるからだ。

だから法師は、小僧たちが「また、人外のお客さんです。人のお

客さんも一緒です」と、腑に落ちないような顔つきで報告してくると、「では、お医者様のところにご案内下さい」と言った。

「それが…医者に診てもらったために来たのではない、直々に法師に会いたい、と」

「どんなお客さんかな？」

「それが…異国の妖のよう。こちらの言葉は普通に話していますが」

「ほお…」

それは珍しい。異国の妖が、こんな山奥の寺に何をしに来たのだらう？

「よいでしょう。こちらにお通し下さい」

「はい」

「アスター」

「ん？」

「これでよかったのかしら。もちろんアスターも私も助かって、ハッピーエンドになりそうだけどね…私たちは」

「他の皆を心配してる？」

「心配？…別にあたしはっ！認めなよ。それってそういうことじゃん」

「……………／／／」

「私はもともと、一人の人間を取り戻すためにここに来たのですけれど…彼の性格を考えると、絶対に彼らを置いていくわけにはいなくて。」

私は、総大将以外の鬼達を全員斬り捨てる自信がありますから。あなたからは特異な能力を感じ取れるのですが、どんな力を持っていらっしやるのでしょうか」

「えっと…私は…圧力変形かな」

「?どんな力なんですか?」

「えっと、空気を操れる、と言った方がわかりやすいかも。例えば、攻撃が来たら、その方向に空気を一気に集めて、攻撃が来る方向に押し出して反射させる。これだけでかなり攻撃を妨害できるから、捕まった時も最初はそれで逃げただけど…」

「でも、それは酸素も一緒に持っていくわけですから、その間かなり呼吸は苦しくなりますね。まあ、役に立ちそうです。…まもなく奴らが戻ってきますよ」

「ひいつ!？」

「あなたは私が言った通りにしてくださいね」

「…今鬼達が戻っているのかな」

「全員戻ってから10秒後に入ったほうがいい。今着いて行ったら面倒なことになる」

「なんでわかるのかな?」

「10秒後には、奴らが食糧を引き出して喰べはじめはずだから」

「…予知できるのかな?」

「うん」

天音の驚きに、悠里は（何故かやや嬉しそうに）答える。

10秒後…本堂の見張りに立っていた鬼達が、最初のいけにえを引き出した。

（…早すぎてもダメ…遅すぎてもダメ…）

飛鳥は恐怖でガタガタ震えながらも、わずかな理性によって逃げ出したい衝動を抑え込んでいた。鬼達が飛鳥の体を喰らおうとした、あるいは斬り刻もうとした、その瞬間に、飛鳥はその部屋の中の空気を一気に自分の体の周囲にかき集めて彼らを吹き飛ばさなければ

ならない。

おお、ウマそうじゃないか…

しかもこの女、何か能力をもっているらしい。

死んでいるのか？全く抵抗しないし、つついても蹴飛ばしてもちつとも動かない

まあ、その方がいいさ。抵抗されても面倒だしな。

(3、2、1…)

バアンツ!!!

(はたして彼らは…空気なしにここに存在していられるでしょうか?)

彼らは人ではない。しかし、彼らももとはこの世に適合した生物だった。そんな彼らが、周囲から空気を取り去られたら、彼らは生きていられるだろうか？

橋本美麗は、息を止めて一気に飛び出した。

一秒目に一匹を斬り捨て、2秒目に切り刻み、魔物の肉片を眼つぶしとしてもう一匹の魔物に放ち、その魔物をまた斬り捨てる。その繰り返しを、美麗は華麗に行う…はずだった。

「!?!」

第三者が斬りかかってくる気配を感じて、美麗はとっさに剣をふるった。

刀と刀が重なって威嚇し合う。

(この気配…私と同じ匂い!?)

同じ真羅刀か? さっきまでこの匂いはわからなかった。よって今自分を攻撃してきた第三者である可能性が高い。

「あなた…彼らと同類ではなさそう。誰?」

「…あなたも、あれとグルなんじゃないかな?」

「まあ、一緒にしないでくださいな。多分私は、あなたと同じような目的でここに来たんでしょうね」

「そうなのかな」

二人はすでに、お互いを殺害対象から外していた。そして、そのまま同じ動作で刀を横に払う。傍にまで接近していた鬼達が一気に吹き飛ばされた。

「水流飛鳥を知らないかな」

「知っています。今あの子も自分で自分の身を守っていることでしょうね。唯一呪いを破つたのはあの子だけ…」

そこまで言ったところで、彼女ははっと何かに気付いたように、振り向いてある方向を見た。天音もその視線を追ったが、煙で視界が遮られてよく見えない。

「…っ! 水流飛鳥はまだ生きています。あの子をあなたに託しても問題はありませぬ?」

「ああ」

その返事を聴いて、彼女はまた微笑んだが、その表情は蒼ざめていて、笑みにははつきりと焦りが見て取れた。

「もう少しで自分の目的を忘れてしまうところだったわ…失礼します」

ビュン!と、唸るような音を立てて、少女は煙の向こうへ飛び去った。衝撃を受けた床に、小さなクレーターができていたが、そこで驚いている時間が惜しくて、天音は急いで飛鳥を探す。

「飛鳥! 飛鳥!」

天音は、背中に悪寒を感じながらも、それを無視して捜す。声の限りに、飛鳥の名前を呼んで呼んで呼んで呼んで呼んだ。

「天音…さん？」

よわよわしい、飛鳥の声が聞こえた。煙が、晴れ始める。

(…！？空気の流れが、おかしい)

なんだか、体に重い圧力がかかっているような、両肩に重い鉛を背負っているような、そんな感覚。

「よかった…無事、だったんですね」

完全に煙が晴れた。そして、天音はその光景に目を疑う。さっきまで天音が対峙してきた、何体もの魔物達をひつくるめたよりも、醜悪な光景。

空気の圧力が、とある人物にだけ集中して、その人物を押しつぶしていた。文字通り、押し潰していた。体のあらゆる方向から、圧力がかけられるようになるか。その結果が、水流飛鳥の足元にあった。

第9節 方程式

飛鳥の足元には、肉塊が散らばっていた。その肉塊の中で、まだ正常な形を保っているものがあつた。

人の首…沢口昇の、首だつた。

「何をしたの…飛鳥…ううん、飛鳥が、こんなこと、するはず…」
「…彼が…勝手にやったこと…どうして…どうして私にこんなこと…」

飛鳥は、泣いていた。どう見ても、気が狂つた精神異常者の目つきはしていなかつた。彼女は全身で「殺すつもりなどなかつた」と語っていた。

「昇、さんは…私を、守ってくれた。だけど…背の高い、男の人が…昇、さんと、同じような力を持って、た…男の人が、私を…」

「操つて、沢口昇を殺させた」

「…」

はつと振り向くと、そこには、学校で出会つた「酒天童子」が立っていた。

「すべて、計算のうちに入っていたのさ」

「あな、た…」

「知っているか？僕が率いている百鬼の過去を。彼らはね…もともとは、人間だつた。どうして彼らが妖になつたか、君は知っているか」

「そんなの、知るわけないな…」

瑠火と混ざり合う感覚に襲われながらも、天音は強気を崩さない。

「彼らもまた、人間だった頃は、異能力者だったということだ」

「…え？」

「もちろん、自然のものが長く生きて化けてしまった者もいる。しかし、妖に進化する過程で、その木々や水、植物達は、過去の能力者達が持つ「異能の力」の影響を受けた。特に、戦国時代は山中も戦場になった。落ち武者狩りもあつたし、命を狙われる戦国武将が姿を隠した。織田信長や明智光秀、徳川家康なんかは、教科書で習っているだろう？」

「彼らもまた、異能力者だった」

「…！？」

「彼らだけじゃない。平安時代の世から、異能者は存在した。安倍清明に、君を使つて僕を殺した四天王の長、源頼光。歴代の異能者は、ゆく先々に、無意識に、「異能の力」を振りまいていた。まともに影響を受けたのが、植物達だ」

影響を受けた植物達が、自我をもち、自由に動き回るようになって、魔物は生まれたのだ。そして、青咲天音や橋本美麗自身も…

「お前だつて、炎の魂と、刀鍛冶の技術に、陰陽師の「異能の力」が加わつて生まれてきたんだから、こんな基本的なことは分かつていただろうに」

「…だから、何だ」

「昔から、人が妖に進化する方程式は存在していた。異能者はいつでも、百鬼夜行の材料になりうる。だから、この世の漆黒の楽園を造ることだつて、不可能ではない」

「…だから、何だ」

「ただ、ひとつだけ計算外の出来事が生まれてしまったのだよ…真羅刀の存在だ。人が君達を生み出したせいで、「妖が人に退化する」方程式も生じてしまった。」

もちろん、その方程式を成立させる「人妖」は君だけではない。

「退化」の方程式を消し去るため、そういう輩も含めて、異能者以

外のただの人間は全て消し去らなければならない」

「…なら、どうしてこんなに人間を集めたのかな。彼らはただの人間。狙うなら、私達人妖だけで十分じゃないかな？」

「僕は何も、肝を配下に喰わせる為だけに彼らを捕まえたわけじゃない。彼らは、君のような「人妖」や、君のご友人のような、異能者を集める「エサ」としての役割も持っている。今度は…君達に「エサ」になつてもらおうか。僕の本当の狙いは、京都霊的守護機関にして京都府警直属機関の、「殺人二課」だ」

「っつ!!!」

「怒り」が彼女の心の中で膨れ上がる。ギチギチギチツ、という金属音がして、彼女の右掌から、溜火の刀身が顔を出した。

全て、嘘だったというのか。

飛鳥をエサに使って、私をここにおびき寄せて、殺す。

そういうことだったのか。

私の友達を、百鬼夜行の一員になんかさせない。

「もう、大丈夫、飛鳥…あんたには二度と、殺人なんかさせない」

「やめなさい、「溜火」。あなたが覚醒めたら、それこそその男の思うつぼです」

「沙羅!?!」

「おや…戻ってきたのか。…まあ、そう組んでいたんだけどね」

「知っていました…この寺での顛末は、私を陥れる「罠」だということは。そして、私があなたの術中にはまっていることも」

「それでも君は、その子を助けたかったということだね。ほお…美しい友情じゃないか」

「美麗さんっ!?!」

「…全く、どうして私をここまで突き動かすのでしょうか、この子は…」

彼女が後ろに背負っているのは、中学生ぐらいの男の子だった。

まるで意識を失っているかのようになり、状況を何も知らずに、眠っている。

酒天童子は、ふっと笑みを消して言った。

「…真羅刀「沙羅」。その子は目を覚まさない」

「！」

沙羅の顔に、影がよぎる。

「この子に、何をしたのですか」

「死んではない。しかし、その子の命は僕が握っている」

「…この子を人質にとつて、貴方は一体私に何を要求なさるおつもりかしら」

「死を選ぶか、それとも僕がひきいる百鬼夜行に入るか。楽園の夢は、平安の世からの、僕と僕の父の悲願だった。楽園創設に協力する気はないのか」

「…その選択、は」

美麗の声が、低くなった。

「不公平が、あるように考えられますわね…あなたの提示した条件に従ったとしても、その方法ではこの子の願いを叶えてあげられません… お断りいたします」

「…そうか…残念だ」

「うつつ！？」

美麗は、急に顔面の左半分を手で押さえてしゃがみこんだ。背中に背負っていた男の子も一緒に落下し、床に転がった。それでもなお、彼は目を覚まさない。

「な…に…！？」

天音の体にも異変が起こる。掌から覗いていた溜火が完全にその刀身を表し、その手に握られたが、どこかがおかしい。

何故、敵であるはずの酒天童子ではなく、橋本美麗に向かって刀

を構えている？

「まだ不完全な真羅刀「瑠火」…人間としての自我を保っていたのが仇になつたな。まだ、その自我が残っているのならば、そこにつけ込む隙がある」

(…：沢口と同じ力…催眠能力！？)

そうか。飛鳥はそうして酒天童子に操られて、沢口を殺してしまつたのか。

一方、橋本美麗も自分の体の全身にかかる力の全容に気づいていたが、一歩も動くことができない。かつての彼女なら、その力は振り払えた。しかし…

(これが…：人間に、戻り始めて、いると、いうこと…：っ！？)
人間にも、妖にもなりきれない「人妖」の、盲点を突かれてしまつた。

「天音さんっ！」

飛鳥が叫び声をあげて駆け寄ろうとする。しかし、そんな飛鳥を鬼達が捕えた。

大丈夫だ、天音。

ザシュッ！と、肉を斬る音が響き渡つた。

第10節 覚醒めた想い

天音が、急に反身を返して酒天童子に突撃した。

「何っ!?!」

突然のことに戸惑いながらも、酒天童子の部下達が迎撃する。そんな彼らを、彼女は華麗に回転して斬りさばいた。しかし、飛鳥を喰らおうとする妖達に、その刀は届かない。

「やめろおおおおお!!!」

大きな怒声がして、天井が一気に斬り裂かれた。そこから雷撃が奔り、飛鳥を取り囲む妖達を直撃する。

「…遅いぞ、瑞島」

天音が、ニヤアツと笑って顔をあげた。

「…天音、さん?」

「…天音?」

瑞島悠里と水流飛鳥は、その天音の口調と姿に違和感を抱く。そして、その違和感の正体はつきりした。

そこにいるのは、青咲天音ではない。完璧な、真羅刀「溜火」だった。

「お前っ!!」

「おい、こいつらと一緒にすんなって。俺は、俺を造った「親」の子孫を殺したりなんかしない」

天音の姿で、天音の声音で、彼はせせら笑うように告げる。その時、酒天童子が己の拳を溜火に向かって振り下ろした。刀で防ぎきる時間も与えずに。

しかし、そこで天音のポニーテールがふわりと浮き、次の瞬間、まるで髪の毛が生きているかのように童子の攻撃を受け止める。髪

に施された黒染めが溶けて、ポタリ、ポタリと床に落ちていく。そうして、彼女の赤髪が姿を現した。

一本一本細長い髪の毛が、まるで太く赤く焼けた鉄を成しているようだった…

「ぐ、うつ…!？」

ジュウウツ、と嫌な音がしたかと思うと、酒天童子は飛び退る。その右腕は、真っ赤に焼けただれていた。

螺旋のように相克する、少女と男の声が酒天童子の頭の中に聞こえてくる。

・ 案外、愚かなのね。

・ お前の記憶が正しければ…

俺に、

私に、

負けるのは二度目だ

(ぎ…あ…)

思い出されるのは山の中。

鬼と化した女に襲われ、餌食となる自分。

何人も何人も鬼がやってくる。

その鬼の正体は全て女。異能の力を持った、女達。

何故か勝手に彼女らが自分を恋い慕ってきた。それを拒絶した。それだけなのに。

彼女達は、勝手に妖へと進化して勝手に自我を失って勝手に人を喰らってきた……

怨念が成す吐息。

怨念が成す視線。

怨念が成す想い

力を失って、

淀んだ空気の籠った、

けがれた森の中をただの影と霞になって

彷徨って彷徨って彷徨って彷徨って彷徨って彷徨って彷徨って彷徨って彷徨

徨って彷徨って彷徨って彷徨って…

「い…やだ…」

あそこへ戻るの嫌だ…!!!

何百年も前の記憶が、彼の心に戦意を呼び戻す。

「僕を…殺しても…状況は何も変わらない」

「…何？」

「…どうでも、いいです…貴方の命乞いなど、訊きたくないわ…」

花卉が、床に落ちる。美麗が戦意を蘇らせ、その掌から日本刀が出現した。

「教えてくださいな…この子を覚醒めさせる手順を」

ギチギチギチ、と美麗の長い髪が浮き上がる。髪の毛先はもはや普通の刀の切っ先と変わらない。

「わからないな…」瑠火が言った。

「この世界を漆黒の樂園に変える、その先に何がある。お前の理想ってなんだ」

「人、は…どこまでもつけあがる。彼らの欲は高ぶり、山地を次々と侵略し、昔からあったものを破壊していく…」

かつては、魔物と人は共存していた。魔物は森に棲む存在であり、人はそれを畏れ敬い、彼らはお互いの境界を犯すことはなかった。

そして、その時代の「魔物」というのは、「神の僕」と同じ定義を指し、彼らが人を喰らうことはなかった。

しかし、近代になって、人口は爆発的に増え、山にも堂々と立ちいるようになった。その過程で魔脈が発見され、人類の中で異能者は生まれていく。そして、魔物の住処は段々と無くなって行き、明治時代には魔物達は人間を敵視するようになっていた。

そして、彼らは人間に対する対抗策を考える。彼らは、平安時代

の世から「異能者」というものは存在し、その約半数が、人を捨てて妖になっていることに思い至った。

- なら、意図的に、彼らを「進化」させればよい。

「楽園…人に脅かされることのない、楽園を…そのためには、僕は負けるわけにはいかないんだ。君らのような人妖に喧嘩を売る時は…」

「こつちもレベルを釣り上げるしかないよなあ？」

第11節 結局は手駒でしかない

「!!」

恐怖に彩られた飛鳥の表情が、無表情になった。感情豊かな両目が、たちまち虚ろになる。床に転がっていた少年も動き出して、目を開けた。

「二人とも…正気じゃない!？」
そして瑞島も、頭を抱えてうずくまる。

「おや…エレクトロマスターを完全に操ることはできないか…しかし、自分の体に流れる生体電気を強めて、果たして十分なかな?」と、彼は謡うように言った。どうやら、振り返らずとも後ろの状況は分かっているらしい。そして、美麗も同じような状況だった。彼の能力は、人間には効果抜群らしい。完全な妖には効かないらしいが、彼の畏れで百鬼を従わせることぐらい造作もないだろう。そして、人妖の精神を完全に支配することはできないらしいが、それでも人妖は壮絶な苦痛を味わう。

(また、ですか…)

全く動けなくても、美麗には少年がどんな状態か分かっていた。彼が近づいてきて、何をしようとしているのかがわかっていった。

体が痛い。そして頭が痛い。橋本美麗の、真羅刀「沙羅」の源が、体内でギチギチギチギチと悲鳴を上げている。

それでも 彼女は、体を無理やり動かす。

少年を助ける為に、少年から遠ざかり、酒天童子を殺す為に、体を動かして立ちあがる。それだけで、体の節々にピキリと亀裂が生じて、鮮血が吹き出す。

しかし、その時には、彼女の背中に少年の手が触れていた。

(ああ…本当に、操られているのですか…)

彼は、懐からカッタ を取り出し、自分の腕にそれを突き刺そうとした。

「…っ！」

彼女は、振り向いて、彼の腕を捕まえていた。

「駄目、でしょう…？ 貴方に触れた私が、一番に傷つくとかつていたとしても…自分を、傷つけたら…」

まるで母親のように、彼女は少年を諭して、そのまま抱きしめた。意識がなく、操られているはずの少年の両目から、涙があふれ出した。彼の手はまだカッタ を離さずに、それを自分の腹に突き刺す。

「駄目…！！」

同時に、何も傷ついていないはずの美麗の腹に突然刺し傷ができ、血が噴き出した。それでも、美麗は動く。彼の腕の関節を微妙に極めて、カッタ を遠くへ放り投げる。

美麗は己の弱さを悔む。童子に操られただけで、このざまだ。それでも。

「あなただけは、傷ついてほしくないのに…！」

「くっ…」

自分の体にかかる圧力を感じて、溜火はとっさに飛鳥から距離をとった。それでもその急激な圧力は止まない。溜火は飛鳥の周りを円に走り、本堂の壁を切り裂いて外に飛び出した。

「決して、逃げるわけではなかった。溜火はその次の瞬間に、信じられない行動をとる。」

迷い家は、常に空中に浮遊していた。彼は、建物の周りの何も無い空気を切り裂く。とたんに、バァンツ、と爆発音が起こる。建物自体には何も起きていないが、確実に何か変化が起こった。

「天音達が入った後で、結界を張っていたのか…あいつらが見つけられないはずだぜ」

瑠火が、大江山のふもとを見やれば…無数の式神たちがこちらへ向かってくるところだった。

「おせえんだ、よっ！！」

圧力の向きを変えて追いかけてきた飛鳥の額を、彼は的確に刀の柄で殴りつけた。気絶して落下し始める飛鳥を、瑠火はその両手に受け止める。

「僕、は…この力を、どういう目的で使えばいいのか…今までわからなかった」

悠里が、軋む体を無理やり動かして立ちあがった。

「だけど、今は…わかる。…僕は…」

悠里は、そのまま足を振り上げて床を踏みつける。バチンと音がして、寺全体がガコンと揺れた。そのまま、彼は限界を迎えたかのようにまた床に倒れこみ、気を失った。

「はっ…所詮は人間…僕に逆らうことなんてできないんだ」

童子は、せせら笑って、悠里の体を蹴り飛ばす。

バチンバチン！

「何！？」

「悠里…力を、使わせてくれるの？」

彼の体から発生した稲妻が、刀を握る天音の右腕に巻き付いた。

「ありがとう」

酒天童子は、その攻撃を避けようとして後ろを振り向く。すると、真羅刀「沙羅」が、殺意に両目を光らせて刀を構えていた。

疑問

橋本美麗にも、青咲天音にもわからないことがあった。

「まず、あのビリビリ男が気絶した時…どうしてあなたが彼の力を使えたのか」

彼が、気絶する直前に、眠らされている人間達を「電気ショック」というもので蘇生させたことは知っていた。

「…今から答えるのは、あくまで推測でしかないけど、いいかな？
…酒天童子が、言っていたことを、覚えているかな？異能者は妖になれるって。あの時、私は…彼の魂が彼の体から抜け出していたのが視えた。それぐらい、童子の力は人間にとっては生きるか死ぬかの絶体絶命になるんだけど、彼は、自分の体を指さして、言ったんだよ。」

自分の力を、使えって」

「なんだか、ドラマになりそうな顛末ですね。…もともと、私も人のことは言えませんが」

「異能者が妖になる過程で行うことって…ああやって、死にかけてもなお、ひとつの願望を貫くことなのかな。だってあれは、どう考えても幽体離脱だった」

「…神様は、何を考えていらっしやるのでしょうか、本当に」

「美麗はもう、人に戻り始めているのかな？」

天音の問いに、美麗は苦笑する。

「…そうかも、しれませんが。何故って、昔は今よりも傷の治りが早かったから。昔は、人ならば死ぬような怪我を追っても数秒で自己再生しました。けれど、今は…全ての傷の自己再生に、30分ぐらしかかりません。…多分、彼が言っていた…「妖が人に戻る方程式」も真実なのかもしれませんわね」

「…それでよかつたんじゃないかな？見たところ、あなたはもう長いこと生きている。そんな何百年も生きたら、空しいと思うところもあると思うな」

「妖の基準から見れば、私など、まだまだ生まれたての赤ん坊ですし、確かに貴方が言うように、空しいと思ったこともあります。だけど…私は、人に戻るのが怖い。完全に人に戻ったら…全ての時間を取り戻して、消えてしまうのではないかと、思うんです」

美麗は、ブルツと身震いして、ベッドで眠っている少年を見た。

「そうなれば、この子とも一緒にいらなくなるんじゃないかと、そう思うと、戻れないんです。だけど、このまま異形として生きていても…いずれは、この子と別れなければならなくなる。だから、どうしていいかわからなくて。」

「…貴方は、どうなんです？あなたは、今の状態を維持しても、私と同じくらいの寿命をもつでしょう…本当に、仲間と別れなければならなかった時は…」

「…誰かに殺してもらうしか、ないだろうね。外見は今のままでも、心は年をとる。その頃には、生きることの楽しみが分からなくなっているだろうから。でも、その話はよしてほしいかな。私は、今の思い出を自分の記憶の中に積み上げていくことで精いっぱいだから」

青咲天音は、立ち去った。もう一人の少年と、友人を見舞うために。一人病室に残された美麗は、少年をじっと見て、物憂げに俯く。

「…まだまだ、あの世には逝けませんね」

「…あの子たちを、見届けてあげないと、いけないからね」

もうひとつの病室を開けると、「彼」が、ベッドから起き上がった。微笑んでいた。

「飛鳥は…?」

「散歩に行ったよ」

朗らかに返事する彼の両腕は、包帯でぐるぐる巻きになっている。

「…嫌な思いさせたね」

天音は、とある出来事を思い出し、わずかに赤面しながら、壁にぴったりと張り付いて言った。

「まあ…強かったよね、君は。僕は、あの時コテンパンにやられていて、皆の意識を覚醒させることで精一杯だった。何にもしてやれなかった、それぐらい僕は…」

「…ちよっと、待って。あれは私じゃないんだ」

「…え?」

「そうか…私が覚醒めたところを、見たのかな、あんたは」

「…やっぱり、その話はよそう」

天音の独白に、悠里は突然水を差した。天音は意外そうな顔で悠里を見る。

「そのことについては、一番言いたくないことなんだから」

「…」

天音はわずかに赤くなって、頭をかいて俯いた。

「あ、あとさー…それよりもっと聞きたいことあるんだけど」

「何?」

「見舞いにきたの、2回目だろ?一回目の時… え…何?どうしたの?なんでそんなに距離をとっているの?」

「いえ、なんでもございません」

「嘘だ。天音が敬語になるときは何か絶対隠してるからね。…突っ込んでいい?この距離は何?」

「…」

「突っ込んでいい?なんだか君顔赤いよ?」

「……」
「…聞いていい？」

薬を飲ませてくれるなら、起こしてくれたらよかったのに、なんで口で…」

ナースコールがブーブー鳴る。

赤面少女に思い切り頭突きされた少年の悲鳴が病棟に響き渡る。

医師が駆けつけると、すれ違いに、赤い髪と同じくらい赤面したパンク少女が、妙な威圧感を放ちながら出て行った。病室では、頬をさすりながら、少年が苦笑している。

「照れんなよな…」と、つぶやいている。

「日本人って真面目だつて言うのは風の噂で聞いてたけどよお…妖も同じじゃねえか。まっとうな理由で立ちあがる妖なんて、どこにもありはしないのに」

「もうすぐ人の世は終わる。あの幻の二百年間を取り戻すのだ！」

第1節 転機

高校生になったっていうのに、まだろくな勉強をしていないような気がする。

おもにこの前私達がせん滅した酒天童子一派のせいだ！

そして…

児童養護施設「あかる」の子供達は、まだ、「沢口昇」がもういないのだということに慣れることができない。それは、青咲天音にとっても同じだった。百鬼夜行は、数日にして撃破されたものの、もう一生取り戻すことのできないものを失ってしまった。天音達は大江山にいて気付かなかつたが、街も被害を受けており、殺人二課が结界を張るのが間に合わなかつたところは、見るも無残に破壊されていた。

さらに、飛鳥の様子がおかしくなり、彼女は里親に出されることになった。何を話しかけても、ぼうつとして答えない。激しい感情表現をするときは、いつも泣いている。

天音と夢乃は、ベランダに座り込んで、明るい日光を浴びていた。

「…こういうことが、狙いだったんやろか。奴らは」

夢乃が、ぼつんと呟いた。

「もう、友達が二人もおらへんかった…」

そう、こうして、彼らは施設の周りの景色を破壊していった。ついでに友情も。大人達いわく、この一連の襲撃は、15年前…つまり、天音達がまだ生まれたての赤ん坊だった時の「悲劇」よりはずっとましだという。

「何だったのかな。「悲劇」って」

「……」

「っていうか、これで、こんなこと終わってくれるのかな」

「…大丈夫や、天音。万が一のときは、うちがまもるから」

「夢乃っていつからそんな男らしいこと言えるようになったんだっけ？」と、後ろから瑞島悠里が天音に抱きついて言った。

「…なんで、抱きついているのかな？」

「居心地いいから。天音にくっついてるのは」

「あつらく？」

夢乃の目が、ピカアア！と光った。

「げっ…」

「二人とも、いつからそんな男女関係やったん？なに、どっちから告ったん？」

「なんでこういう話には喰いつきがいいのかなあ！？後悠里も照れるのはやめてくれるかなあ！」

「いやね、天音って外見と違ってすっごくツンデだからさ」

「また頭突きしてほしいかな？」

名残惜しげに背中からは離れた悠里だが、今度は天音の隣に腰掛ける。天音は夢乃と悠里にはさまれたような格好になった。

「もう、六月になるのにな…」

田山華と出会うまで一カ月。彼女と出会って死ぬような目にあって、その一週間後に百鬼夜行の襲撃。それからようやく、何事もなく数週間たって、現在に至っているが、街をゆく人々の顔は暗い。京都を離れる人も出てきている。

その時、指導員の先生が三人を呼びに来た。

「大事な話があるから、食堂に集まってくれ。今他の子たちも集めているから」

不吉な予感が、した。

三人は、暗い顔でたがいを見た。

「皆さんも知っている通り、最近、京都はとても治安が悪くなっ

てきています。そこで、施設側は、皆さんに、里親のところへ行くか、施設を移籍するか、どちらかを考えてほしいと思っています。京都にいれば、皆危険だからです」

子供達は、その言葉にシンと静まりかえった。

里親など、受け入れられるはずがなかった。皆と一緒にいたかった。

「残れないん、ですか…」

集会の後、天音は蒼白な表情で衿子に質問した。

彼女は答えない。その沈黙がとても腹立たしくなって、

「残れないんですかって聞いてんだよ！答えるよ！」天音は声を荒げて詰め寄った。そんなふうに言われても、衿子は聞こえの悪い返事を選ぶことはおろか、返答することさえできなかった。

「…ごめんね。上からの通達やから…」

「どうしても、京都に残りたい？」

天音の愚痴を聴いてから、夢乃は静かに聞いた。

「なんか…自分だけ逃げるっていうのは、嫌なのかな？…アハハ」

「うん、うちもそう思う」

夢乃は天音の独白をあつさり肯定した。

「ひとつだけね、残る方法があるん、知つとる？」

「何？」

「京都府警直属退魔機関…殺人二課に入ること。要するに就職だね」

「あ…無理かな、私には」

天音は言葉を濁して言った。

「…そうか」

夢乃もあまり深く追求しなかった。知らないふりをしていたが、天音の本性は知っていたからだ。その場に、天音にベタ惚れしている瑞島悠里はいない。

両腕の怪我の治療に行っていた彼は、天音の本性を知らない。

瑠火。

なんだ？

私は、人を捨てる以外にないのかもしれない。

なんだいきなり。別の施設に移るんじゃないのか

なんかさあ…そうやって逃げ回ってばかりいるのは、いやなんだな。

それより、人を捨てるというのはどうということだ。俺は…！

大丈夫。心は保っていられる。

ねえ、瑠火。私の先祖の刀鍛冶って、どんな人？名前は？

蒼碯の祖先となったのは、蒼碯奏十郎忠信。刀鍛冶として、また、「封印」の異能者として、多くの刀を鍛えた…

そこ！意思をもつようになった刀は、瑠火だけなの？そもそも真羅刀の定義って何？

確かに、あいつは…俺以外にも数多くの刀を鍛えた。大多数は、きちんとした使用目的…つまり妖の討伐に使われたが、他の刀は、俺のように、戦国の戦に使われて、凶暴な妖になってしまった。もつとも、降魔剣として使われた剣は、近代化に伴ってその存在を忘れられ、結局化けてしまったが…

彼らが生きていくというのなら…どこにいるのか、わかる？

：

「夢乃！」

「!？」

女子部屋のドアを焦ったように開けて、悠里が飛び込んできた。

「天音はまだ帰ってきてないか!？」

「えっ…どうしたん」

「天音と連絡がとれない。何度電話しても通じないんだ！」

「ええっ!？」

確かなのか…本当に…

真っ黒な、煙なのか闇なのか影なのか分からない何か、境内を覆う。その煙の中から、一人の僧侶が出てきた。

「私は、観黎かんれいと申します。私はこの寺の住職なのですが、そちらさまのおっしゃっていることが本当なのかどうか、確認させていただけないでしょうか。私は「過去視」ができるのでございます」「…その力は、私が覚えていないことも思い出させてくれるのかな？」

「もちろん」

観黎と名乗った老人は、震える手で、天音の額に手をあてた。

刹那！

天音の視界が、真っ白に埋め尽くされた。

生まれて初めて見た両親の笑顔が、祖父の笑顔が、家族の笑顔が、蘇ってくる。覚えていない、知らないと思っていた記憶が思い出される。

白い病室の中に生まれた、白くて穏やかな世界が、

紅くて恐ろしい世界に塗り替えられる

瞬間を。

祖父の橙色に輝く目を、

何か恐ろしいものに向かって刀を振るうその腕を、

敵の凶刃に貫かれるその姿を、

ただ一人の赤ん坊を護るため、死を覚悟して瑠火に全てを委ねて
覚醒したその男を、

天音は確かに思い出した。

「…っ」

つうつと両目から伝う涙。

祖父は、自分を護るために死んだというのか。

「じゃあ、瑠火がいつも私の体の中にいたのも…」

その時の「親」である祖父の遺志を、継ぐため、そして彼の未来
の「親である」自分を護る為だったのか。孫が大きくなって、妖に
狙われることのないように。命の危機に直面した時、瑠火が孫の心
に代わって敵と対峙できるように。

「そのような次第で、ございましたか…」

観黎は、慰めるように声をかける。そして、轟くような大声をあ
げて叫んだ。

「聞け、者ども！蒼碕の子孫が戻られたぞ！」

本当なのか!?

お戻りになられたのか!

やったああ！我らの主と我らの仲間がお帰りになられた！

煙が晴れたところには、多くの人々が笑顔で天音を見ていた。し
かし、彼らは人間ではない。

皆、完全なる真羅刀だ。
それなのに。

「え…どうして」

彼らは皆、蒼碇忠信によって造り出された降魔剣だ。

道具が意思を持ったものを、人は皆、「妖」に分類する。だがなあ、どうして俺達が意思をもってはいけない？どうして、「親」を慕ってはいけない？

意思を持った「妖」が、皆敵であるわけではないんだ、天音。

「俺達、ずっとずっと「親」を探していました。300年以上、捜しても見つからなかったから、蒼碇の血は絶えたのかと絶望して…せめて、本当の「親」が、毎年のお盆にいつでも帰ってこられるように…ここで、遺体が腐敗しないように、ずっと親の体を護り続けてきました。」

「だけど…溜火が、見つけたんですね」

「ずっと…ずっと、我慢してきたっていうの？貴方達は、殺人衝動が…」

「ああ、俺らも成りそこないです。妖特有の衝動なんて持っていませんから」

500年経った今、今はお前が、俺達の「親」だ。お前がどんな道を行こうと、俺達はお前に従う。

第3節 戒厳令

天音が行方不明のまま、三日経過　　：結局、彼女は、何かの原因で「死亡」したのだということになった。とはいっても、死亡届を出せるような状況ではなく、警察や役所は復興の為の仕事をするのが精いっぱいだった。そんな中で、夢乃達が、施設を移籍するか、里親のところに行くか、選択する締め切りが迫った。

そして、綾小路夢乃、瑞島悠里は、自発的に「あかる」を去り、瑞島悠里は、京都府警直属殺人二課に「就職試験」を受けに行った。夢乃は、もともと殺人二課の一員であった。今までは、まだ技術が未熟だったために活動していなかったただけなのだ。

悠里は天音の失踪から、夢乃は友人の中で、一人は殺され、一人は施設を去り、一人は行方不明になってから、穏やかだった子供時代と永遠に別れを告げたのである。つまり、過去の遺恨は忘れ去り、友情も、恋慕も、全てあきらめたのだ。

そんな彼らをひきとめることができる大人は存在しない。悠里の温度操作能力は、殺人二課にとって不要なはずがなく、また人手も必要だった為、彼はすぐに就職試験に受かった。

そして、彼らが殺人二課に入ったばかりの7月…二課に、恐ろしい知らせが入った。京都だけでなく、全国の殺人二課に知らせがいつているという。

中国と韓国の妖が、日本に向かっていているらしい。

京都で百鬼夜行の大量発生があった同時期、政府は中国や韓国と連絡がとれないらしいことを、首都の報道機関が報じていた。

この二つの国でも、京都と同じことが国レベルで起こってしまったのではないか。

政府では、国民をどこかの国に受け入れてもらい、避難してもら

うか、それともこのまま国民には何も知らせず戒厳令を布告して戒態勢にあたるか、何度も議論が行われた。そうして政府は、国民に戒厳令を布告することを選ぶ。

防衛大臣は、全国47県の殺人二課に、国の霊的守護および、異能者の探索を命じた。必要があれば、この国の妖を式神にして戦力増強してもかまわない、アメリカからも応援を呼ぶ、との通達が入り、日本は一気に戒態勢を強めたのである。

京都にも、ぞくぞくとシスター達が到着した。アメリカは、自国も守らなければならぬ為、神父達だけを残し、シスターを海外に派遣したのだ。もちろん、ただのシスターではなく、異能者であったり、魔術師であったりと、戦闘を心得るシスターだ。

「君達も、もはや穏やかな日々は終わると考えた方がいい。これからは、戦争になる。人と妖の戦争は、普通の戦争よりも死傷者がたくさんでる。しかし、だからこそ私達は生きなければならぬ！」
悠里と夢乃の上司は、緊迫した表情で部下達にかたまった。

この出来事は、遙か遠い国での出来事でも、歌劇団が見せてくれるパフォーマンスでもない。

本当の戦争の、前触れであった。

違う道から、友人を助けることを選んだ天音。

戦うことで、自分達の世界を護ろうとする夢乃、悠里。

土御門興亜は、その三人に一切余計な口出しはしなかった。

そして戒態勢を固めてから間もなく、戦いは始まる。

「日本が見えてきましたよ」

ガ・ゴイルが、大将に報告する。

「…まるで、あの時のようだな。…かつてロシアが、日本を襲撃する際に派遣した、バルチック……」

「それを言わないでください。あれはあの時負けました。負け戦の話をしなくてもよいと思います」

「…すまん。今のは忘れてくれ。…日本沿岸に砲撃を開始しろ。

弾丸に部下を乗せて上陸させる」

第4節 行く末はどこへ

信じられなかった。

ついこの間に高校生になったばかりの自分に、人妖の百鬼夜行を背負う器があることなど、信じられるはずがなかった。

それでも彼女は、文句ひとつ言わずに、彼らを受け入れることに決めた

…

ティカ・サーニヤ・セラヴィカを含む数人の殺人二課隊員は、京都舞鶴の港に配置されていた。海辺の住宅街に住んでいた住民は、皆奥地へ避難していて人気はない。

「沿岸に船団を確認…ええ、妖気も確認しましたぜ。これより連絡を遮断し、戦闘を開始しちゃいます」

慣れない日本語で伝えてから無線機のスイッチを切ったその時、ドン！と何かが激突するような音がして、港全体が激しい揺れに襲われた。

「！！！」

突然目の前に近づいた妖気が、港の下…つまり自分達の足場のすぐ下まで移動してくるのに気づいて、彼らは全員後ろに跳躍した。案の定、港の地面が地割れして、水の奔流が噴き出して港の約半分を埋め尽くす。

（海坊主か…！？）

全員が、また同じようなことを考えた。

しかし、目の前に漂う海水の中から顔を出したのは、海坊主ではない。

「…人魚！？」

その醜悪な面構えをした化け物は、確かに人魚だ。記録には、人魚は美人であるなどと書いてあるが、実際はそうではない。人魚が獲物を獲得するために、上半身だけ美人に化ける必要があったただだ。

「きやがったな…！」

それでもまだ、ティカは武器をとり出すようなことはしない。彼女よりも水場での戦闘を得意とする人間がいるからだ。

そうして、水流操作系能力者、三隅幸四郎が、戦闘を開始する。直後、人魚の周りで爆発が起きた。三隅が、人魚が纏う空気に魔力をぶつけて空気に漂う酸素と水素を無理やり化合させ、水を引き出したためだ。本人の魔力が籠った水の砲丸のような一撃に、人魚はペシャンと倒れこんだが、次の瞬間、人魚の後ろで海水が大きく盛り上がり、津波のようになって彼らを襲った。

しかし、人魚が放った水の一撃も、彼らには当たらない。

「……万事問題なし」

ティカが発砲した弾が、水を吹き飛ばしたからだ。

ティカは発火能力者だ。しかし、ティカ本人の魔力、つまり能力のレベルがあまりにも高いため、戦闘の時は関係のない人間まで焼死させてしまう危険があった。

それを、ティカは現代にもまだ廃れずに続く「魔術」によって抑え込むことにした。ただの超能力者の次の段階として、魔術師となった。一流の結界術師によって、耐火術式が施された魔術専用のマスケット銃を扱い、能力と精神力で弾を錬成して発砲する。紅く染め上げられた修道服のスカートの下には空間接続術式がかけられ、無数のマスケット銃がそこに隠してあるという。

しかし、ティカは真説の魔術をめったに使用しない。銃身の長い、真っ赤なマスケット銃を二丁拳銃のようにして発砲することで彼女

の戦闘は普通に成り立つのだが…。

水がはじけたその向こうには、船団がさらに接近していた。

「数が多いな…」

「何言っちゃってるんですか。上陸させちゃわないようにしたらいいんです」

ティカは平然と言って、前に進み出た。人魚が襲いかかったのを瞬殺し、また伏兵が飛びかかったのを瞬殺し、近づいてくる船団を見据えて、

「三隅さん。私の力で皆が焼死しないように、バリア造っちゃってくださいませんか。私、銃を使わない戦いもできちゃいますけど、そうしたら皆まで怪我しちゃうかもしれませんから」

三隅は、戸惑ったようにティカの後ろ姿を見たが、「早く！」怒声に押されて、海水を操ってバリアを造る。

「おっけー…それじゃあ、」

ティカはだん、と3mぐらいの高さにまで跳躍し、

「発射〜！！！！！！！！」

両手から、まさに砲弾のごとく、巨大な炎を船団に向けて発射した。続いて彼女の体から熱波が奔り、海水が衝撃で一気に船団の方に波が引いていき、港に停泊したままだった漁船が、ともづなが切れて転覆し、海面を滑っていった。三隅が造り出したバリアも、熱波を受けて軽い水蒸気爆発が起こったが、彼の頑張りによってバリアは保たれた。彼が水で他の隊員を防護していなければ、ティカ以外の隊員はまとめて吹っ飛ばされていただろう。

かくして、船団は総崩れになり、隙をつくる。海に沈む船や、自滅する船もでた。その隙をついて、ティカが反撃にしようとしたが…違和感に気付いた。

まだ妖気が薄まっていない。むしろ、段々濃くなってくるような……？

ティカは、その違和感の正体に気付いた時、蒼ざめた表情で他の隊員に向かって叫んだ。

「セドナが来る！港から離れる！」

次の瞬間、ティカが立っていたあたりの地面が割れて、海水が噴出し、彼女の体を飲みこんで空に舞い上がった。冷水と激しい水圧が、ティカの体力を奪い、全ての酸素を吐き出させる。

(ぎ…あっ…)

セドナ。

イヌイット神話に伝わる冥府の女王にして、海の女神。

人間を溺死させることに至福の喜びを見出してしまった女王。

人間がそのセドナの全体像を見た時、待っているのは死だという。

かくして、ティカ・サーニャ・セラヴィカはそのセドナの全体像を見てしまった。

(死んじやうのか、私…)

人間が、神に逆らうことなどできるのか。その疑念を抱いた者は皆、セドナの畏れにはまる。畏れにはまった者は、ひとつの事実を忘れてしまうのだ。

神と言われていようが、崇拜されていようが、所詮は「人外の存在」であるということに。

(…違っっ！私が崇拜すべき神は、こいつじゃない…!!!!)

第5節 少女の再来

「あら…」

セドナは自分よりもはるかに小さく、大きさはセドナの人差し指にも満たない少女を見下ろす。少女は、倒れて動かないティカ・サーニャ・セラヴィカの体をまたいで立ち、ティカを護るように、セドナを見上げていた。ふわふわの髪の毛はまるで染めているかのようにつ赤で、ポニーテールのようにして括られている。何より、その金色の瞳が殺意を宿していた。来ているのはまるで切り裂かれたかのように露出が多いワンピース。

体は小さいものの、大妖怪に匹敵する妖気と殺気を放っている。

「あら…もう一人おバカさんが来たわね」

「一体何が目的かな」

少女の答えには、言葉のひとつひとつに殺気が籠っている。セドナはその問いを突き付けられて戸惑うはずがなかった。

「決まっているでしょう。住処の開拓、そして人類の駆逐よ」

「…それほどまでに人類と道を違えるのかな」

「そうよ。貴方達に「死にたくない」という思いがあるように、私達も、人類に淘汰されて消えるなんて…屈辱だわ!!!」

ギリリ、とセドナの目が殺意に光る。

その殺意を、

蒼崎天音は確かに受け止め、

「皆！私に力を貸して！」

それを合図に戦闘は始まった。

他の隊員達は、突然の少女の登場に傷の痛みも忘れて驚いていた。そんな彼らの肩を、とんとんと叩く者がいる。

「怪我をしているわね？」

と、確認したのは、アスター・エルトウーナとともに嵐山へ逃げた消息を絶っていた田山華だ。長い髪をロールで巻いた現代的な髪型は変わっていないが、今は着物を着ていた。

「ほら、見せてください…治してあげますから」

隊員達の怪我を見ると、華は患部に手をかざし、その傷を癒していった。もう華に、殺人をすることで快楽を得ることなどありえなかった。

「ありがとう。助けられたことは感謝している。しかし…君達は何者なんだ？」

頭部外傷から完全に回復した三隅が、華に問う。華は苦笑して答えた。

「私はただの人間だけど…「人妖」ってご存知でしょうか。あの人たちは凄いですよ。体は妖になり切っているのに、ひとつの思っただけで、人間の心を保っている。そんなの、神業だと思えないんです」

住宅街の向こうから、淡い光の玉がいくつも飛び出してくる。そして、天音の体に異変が起こった。天音が立っていた地面から紅いというより、真っ白な炎が天音を飲みこむ。

異変を感じ取ったセドナは、先手を打って攻撃をしかけた。海水が巨大な槍のように渦を巻いて、異常な速度で天音の体を貫かんと襲いかかる。

が、あっけなく打ち消された。

「全く、ジャパニーズサタンが時間稼いでくれちゃったおかげで回復しちゃったぞー？」

不敵に笑うのはティカ。セドナの水でダメージを受けた彼女は、マスケット銃を手にして立っているのがやっつとだ。それなのに、彼女はそれでも自分の切り札を使おうとしない。

炎が晴れた後には、その体には大きすぎるぐらいの巨大な虹色の炎が、まるで翅のように天音の背中から生えていた。

天音は右掌を見た。その掌には、カーンと呼ばれる不動明王の梵字が刻まれている。そこから、降魔剣溜火が出現した。降魔剣は、今までとは違う燃え方で、蒼色の炎を放っていた。

「私は…この人生を、守る」

天音はそのまま、溜火を大きく横へ振った。それだけで空気が激しく振動し、衝撃波と熱波によって酸素が燃焼して、セドナを襲う。セドナは、それを首を振っただけで回避した。張り巡らされた水のバリアが炎を消し去る。

バカね。そんな衝撃波程度が簡単にあたると思わないでちょうだい。私の攻撃を打ち消すことはできても、炎と水は相性が悪いの。それに…水は、ただ操るだけではないのよ。

「!？」

天音は急に息が苦しくなって何かを吐きだす。

それは、天音の体の体液だった。

ティカも同じような目に遭って苦しみ始める

「がっ…あうっ」

水を操る能力者は、強くなると、水分が多い成分なら、体液でも、血液でも、なんでも操れるようになる。そこから無理やり純

第6節 セドナVS蒼崎天音

「連絡が入りました！只今殺人二課隊員が、京都舞鶴で敵方と交戦中！」

「おおおおあああああああああ！！！」

少女は天に向かって大声を轟かせた。降魔剣が、炎剣に変わる。炎がいつそう大きく燃えあがった瞬間に…

炎が再び天音の体を包み、一気に大きく膨れ上がり、溜火の刀身が、大きく伸びた。

セドナにとっては小さな針ていどの降魔剣が、セドナを斬り伏せるには十分の巨大な大剣に変わる。炎が、まるで人間のような形をとって、動き始めた。ティカの目からは、炎に飲まれた少女は未だに視認できない。

「まさか…あの子が!？」

「…人型を捨てましたか」

またも第三者の声に、ティカは振り返らずに発砲する。が、第三者は大きく体をそらすことで弾を回避した。

「ご安心を。私は後から斬りかかるような卑怯者ではなく、ましてやあなたの命を狙おうとも考えておりませんから。ただ、感心していただけです」

小さな声で語るのは、白いトレーナーに黒いロングスカート少女だった。長いストレートの髪が桃色であること、両目も桃色に輝いていることが、彼女の異質さを語っていた。

「貴方は、あの子を助けちゃわないの？」

「私はあの人を助けるほどあの人と親しくありませんので。それに、私は…もうこの子と一緒にいるだけで十分ですから…けれど、彼女を尊敬することはできません。一体何が、どうやって、彼女の心を正常にしているのか。あそこまで人間を捨ててしまえば、もう発狂しているもおかしくないのに、まだ心は正気を保っている。人は、守りたいものがあつてはじめて強くなれるのでしょうか。…どんな人なのでしょうか。彼女の心を占める存在は。」

ティカが小さな気配をさらに見下ろす（ティカが背が高かったため、小さな気配が視界に入っていなかった）と、少女よりも背の低い少年が、少女の後ろで静かに佇んでいた。

「あ、ご紹介しましょうか？」

「…いや、いい」

「まあ、この子は本来守られなくてもいいんですが…失語症であるうえに、戦い方が私にとっては気に入らないので。だって、自分の体を傷つけて初めて敵を傷つけることができるなんて、おかしいです」

「…共有能力、か」

少年が、眉間にしわをよせて少女を睨む。しかし少女が気にした様子はない。

セドナは躊躇した。少女はここまで人を捨てたはずなのに、まだ人間の臭いがする。白い炎の塊が、一步を踏み出すと、炎に触れた海水が水蒸気爆発を起こした。

…ここで貴方を止める。あの子達を傷つけるわけにはいかない。

まっすぐな覚悟で射抜かれて、セドナの心の中で何かが爆発した。

邪魔なんだよおおおオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

おお!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

ありつたけの魔力を込めて、巨大な炎がまとう空気から無理やりにありつたけの水を引き出す。すると、空中で恐ろしいぐらいの轟音とともに大爆発が起きた。

セドナの水によって炎が消火される。

しかし、地面に少女の遺体を見つけることはできない。

セドナにとつてはちっぽけな存在が、目と鼻の先に迫っていた。

針のような小ささの刀が一気に刀身を伸ばし、セドナに斬りかかる。セドナはその刀から、彼女が一人ではないことを悟った。何人も、何人もいる。50人近い人妖の力を、彼女はその肩に背負っている。あの一太刀を浴びればおしまいだ。

「…全員の力を借りたわけではないかな」

一瞬だけ、少女が苦笑した。

「私に力を貸せる状況にいたのが、5人程度だったから。後の皆は私の命令で太平洋沿岸で独自に戦っているかな。」

貴方達の侵攻を止める為に
そのすぐ後、スイッチを切り替えたかのように、ガチンと瞳が凍る。

「だから死ねよ」

そうして大きく刀を振りかぶったが…

天音、罷だ！

「っ！水…っ!？」

セドナはいつの間にか天音の後にいた。海水がどつと港を飲みこ

み、テイカ達が後ろに飛び退って退避せざるをえなくなる。第二陣の人魚たちが押し寄せて、彼らは交戦を始めた。

気づくことはできなくても、恥ずかしいことはないわ。だってね、水で幻をつくるのに数秒もかからないのよ。これに気付かず、これが命取りになった人間は、あなたが初めてではない。

けれど、貴方の妖の血に敬意を表して…貴方を燃料にさせて頂きます

セドナの水に触れた人間は、たちまち人形と化す。しかし、セドナとしても人妖相手にこの技を使ったことはないため、水で触れたら人妖がどうなるかは未知数である。天音の体に水が巻きつき、どす黒い液体と化して彼女の体を侵食しようとする、が…

バチバチバチッ！！！！

「ぐ…ッ…」

力を押し返してきている…妖の力か！

天音の背中から生えた翅が、ギチギチギチと動いた。まるで風を仰ぐようにゆっくりと動いたかと思うと、羽としての原型を失い、二つの光の柱のように、水を貫こうとする。

まるで、刀が標的を貫こうとして、なかなかそれが出来ないかのようじ。

そうか、とセドナは理解した。

天音の心はまだ人間だ。本来なら、セドナの畏れに簡単にはまる部類なのだ。それでも彼女は、セドナの畏れにはまることなくここまで抵抗している。

誰か、天音の心を支えるモノが、天音の体内に棲んでいるのだ。しかもそれは一人ではない。

少女は言った。

「私に力を貸せる状況にいたのが、5人程度だったから」

人間である彼女はセドナの水に抗うことはできない。しかしそんな彼女に代わって、彼女を慕う人妖達の力が、セドナの水と拮抗しているのだ。

「子供たちの力を…はたして止められるかな（……………）？」

そう、幼いながらも母親を護ろうとする子供が。幼くまだ心も成熟しない子供が、ただ純粹に母を慕う子供が、力を手にいれてしまつたらどうなるのか。

天音の「子供たち」が親離れすることは未来永劫ない。

何故なら、今までの歴史の中で唯一信じることができた人間は、自分達を造り出した刀鍛冶「蒼碇」の家系だけだったのだから。

天音の体を枷のように締め付ける黒い水が、バチバチツと感電したような音をたてながら蒸発していく。帯のように少女に巻きついてきた水が、彼女の体内から流れ出る力の処理が追い付かず、段々と力に押されて膨張していく。

「…………ああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！」

苦痛の声をあげた少女から、一気に水の帯が離れた。しかし、セドナの魔力を無効化させることはできない。一度しかけられた呪いは解除できない。

天音の体から放たれる魔力が、彼女を絞めつけようとする水の帯を確かに押し返し、水の帯は遠巻きに少女を取り囲むような格好になった。

…私の水を浴びたものは、心の弱い人間ならすぐ即死するし、心の強い人間も長く苦しむ。例えば人外が存在でも少しづつ確実に力

を削がれていく。今の貴方だって、自分の魔力で私の魔力を相殺するだけで精一杯ではないのかしら。

「本当にそう見えるかな」

「平気で人を海に沈めて、それでも神様を名乗っている貴方より、私は命の重みを知っている。私の方が、貴方よりもずっと強いんだよ。」

10分。10分で片付けてあげます」

第7節 海の底

貴方…ふざけているのかしら。自分の本来の目的を忘れていないかしら。貴方がそうやって私に気を取られていることで、人魚達が上陸に成功したことに！

「…気づいていたよ？でも、ここで貴方から離れたって、貴方による犠牲者が増えるだけかな。私は、人を海に沈めて喜ぶ貴方だけは、上陸させたくない」

そう。やはり貴方を殺さなければ、前には進めないようね。それに貴方も弱くはないみたいだし…こちらもレベルを向上させるしかないわねえ？

セドナの、巨大ながらも美しい容姿が、崩れていく。まるで、包丁で寸断されたかのように、人間のパーツが崩れて、別の形を成していく。

例えるなら海水の上に生える大木。ただ、その葉は緑ではなく、紫色だ。全ての万物の死を象徴しているかのように、ただ、海水の上に着いていく。天音は、海面に虚ろな目をした魚がたくさん浮いてくることに気が付いた。

「魚の生命を、吸い取った…？」

例えば大木に「根」があるとしたら。木は地面に張り巡らせた根から養分を吸収し、それを源に成長していく。セドナは、一定の距離にかかると海域に泳ぐ魚達を…

(駄目だ…殺さなきゃ！)

天音は速攻で攻撃する。

ここで本気をださなければ、セドナは窮地に陥るたびに海域の魚を食べて強化化する。セドナの力の源を消し去ることはできないか

ら、生半可に戦っていたら間違いなく不利になる。自分にかかった呪いを気にしている余裕はない。

その時、ずずずと不気味な音がして、海水を突き破って何かが現れた。

「何：あれ」

現れたのは、木の根のようなもの。先端に小さな穴があいている。

言っただでしょう、貴方には燃料になってもらうって！

「っ！」

天音は空中に難を避けるが、木の根はどこまでも追いかけてくる。穴から彼女を飲みこみ、本当に「燃料」にするつもりなのだ。

逃げてても無駄よ！木は成分によつて成長する。だから地面に張り巡らされる根に、距離も限界などない！例え貴方が宇宙に逃げたとしても逃げられない！

Bannon！！

「命削つてでも殺つちやいたいのね、ガールは」

ティカが不敵な笑みを浮かべて、セドナに銃口を向けていた。たった一発の弾が、大木の表面にクレーターを開けた。天音を追いかけていた根が、海水をぶち破つて水面に沈んでいく。

「おい！そのまま成長しちやいなさいよ…標的が大きい分撃ちやすうからさあ！

私の弾に、限界などない。タイムラグなしで打ち出される弾と、そのこのガールの斬撃に、セドナ、貴様はどこまで耐えられちゃうのかなあ！？」

そう言っている間にも、ティカは次々と発砲し連射していく。片手でセドナを狙い撃ちして、もう片手で不意打ちをしかけてくる人

魚たちを瞬殺していく。息切れもしないし汗も流さない。ただ流麗に、流れるように。

邪魔だあああああああ！！！！！！

ただでさえ不完全だったティカの足場が、完全に決壊した。木の根の標的がティカに変わる。

「ちっ！」

海水に沈みつつある港の瓦礫を飛び移り、ティカはまだ海水に侵されていない足場がある住宅地に退避するついでに、他の隊員も無事に退避しているかどうかを確認する。屋根の上に立って、そのまま銃撃戦を再開しようとしたが、その足に根が巻き付いた。その根に向けてティカは強引に発砲し、根は切断されたが、切断された根は網のようにティカの足首に巻き付いたままになった。

それにも構わずに、ティカは銃撃戦を再開する。ティカに押されたセドナの隙をついて、天音が隕石並みの速度で攻撃をかける。また大木の表面に、まるで固い石を巨人が引き裂いたかのように、天音の身長よりも大きい刀傷ができた。気味悪いことに、そこから血が噴き出す。木から血が噴き出すなど、ありえないことだったが、この木は確かに生きているのだ。

そうしてセドナは、初めて自分が窮地に陥ったことを理解する。

天音は上空に飛び、掌から刀を引き抜いた。溜火を引き抜いたわけではない。そして、海上にいる標的からわずかに距離をはずし、標的のすぐ近くの海水に向けて、まるでダーツのように刀を放つ。

真羅刀「瑞葉」。海水の魂の一部と刀を融合させた日本刀。海の魂は、万物の魂の中で最も最大級の巨大な魂であり、この魂を祖先として、水に生きる動物はもちろん、たくさんの水の妖が生まれた。瑞葉もまた、海の魂のはしくれであった。

刀が光を放って人型をとる。小さな女の子のような姿になって、瑞葉は海水の中に飛び込んだ。

母さん、ご命令確かに受け取りました。

水の中で瑞葉が視たものとは？

まず、本当に巨大な大木が、水の中に根を張り巡らしていた。魚達が、根に貫かれてそのまま死んでいる。木の根は、不気味に脈打っている。

瑞葉は突然気が付いた。

このまま海底にまで根が届いてしまったら大変だ。

セドナの力は未知数だから、あらゆる可能性を考えて、先手を打たれるのを阻止しなければならない。張り巡らされた根が日本中に届いて、根に貫かれた人間が死ぬというのも、笑える冗談ではない。

瑞葉は「母」の命令通り、手にした刀を横に振った。それだけで、見えない超高速の衝撃波が木の根を次々と切断していく。根を斬っていくにつれて、瑞葉は一番太い根が、底まで伸びていることに気が付いた。

まさか！

瑞葉は急いで海底へと泳いでいく。弾丸のように、海底へと続く根を追いかけていく。今見えている太い根を切断することも試みたが、衝撃波ではなかなか斬れない。ならば直接斬ってみてもいいが、そうなればどうなるかわからない。斬ってみたらそのまま刀が捕まっって命を吸い取られました、なんて笑えないオチもありえる。安全と、瑞葉自身が望む展開を実現させるためには、衝撃波にまだ脆い根の先端からダメージを与えなければならぬ。

そんな瑞葉の行く手に、セドナによって操られたサメ達が立ち塞がった。

「…邪魔です」

瑞葉は、刀を真つすぐにサメの口の中に向けた。サメが彼女を咀嚼するタイムラグも与えず、ただ弾丸のようにサメの体内を次々と貫いていく様は、まるで赤ん坊の為に造られたいくつものトンネルを模した遊具を駆け抜けていくようだった。

しかし、そんな瑞葉でも躊躇するぐらいの出来事が海底で待っていた。

狭いサンゴの岩を破壊して、紅い目をもって出現したのは…

「クジラ、ですか…？」

この巨体になると、今までのようなサメを一刀両断して進む突貫工事は通用しない。クジラが大きく口を開け、息を吐きだすと、クジラの息に触れた海水が深い紫色に染まった。息に含まれる天然の毒にプランクトンがやられたのだ。

あの息を浴びれば死ぬ。

こうしている間にも、根は海底へと進んでいる。今は根を切断することだけを考える。

瑞葉は分が悪いとみて、とりあえずクジラの視界から逃げた。クジラの背中を駆け抜け、そのまままた海底を目指し根を追いかける。その瑞葉をクジラがまた追いかけてきているかどうかは、確かめようがない。海底へと下る間にも、瑞葉は衝撃波で根の切断を試みる。

しかし、全く切断ができないので、瑞葉は試しに破壊した岩の欠片に魔力をこめて、根を傷つけてみた。すると、太い根からまた細い根が出て、岩の欠片を絡め捕り、そのまま吸いこんでしまった。

「…っ！」

瑞葉は気が付いた。頭上にはクジラが口を開けて迫ってきている。クジラが海上からの光を遮り、あたりが真っ暗闇になり、クジラが無理やり通り抜けたことによって破壊された海の断崖の欠片も一緒に降ってきた。

「そうだ…」

瑞葉は何かを思いついた様子で、微笑んだ。

「母さんの望み通り、必ず生きて帰ります」

第8節 不意打ち

セドナが打つ次の一手がどんなものなのか、全く予想が付かない。だからこそ、大木の根が本当に海底に届いて恐ろしい何かが起こる前に、災禍を孕むその根を断ち切らなければならなかった。だからこそ、天音は海の魂の欠片を受け継ぐ真羅刀を放った。いくら人外が存在でも、天音が受け継ぐ自然の魂は炎だ。どう見ても水とは相性が悪く、自分を慕ってくれる「子供」を使うしかなかった。

本当なら、そんなことは絶対にしなくなかった。

真羅刀に斬れないものはない。だからこそ真羅刀は命知らずで戦おうとする。その特徴を、天音は真羅刀の最大の弱点とみなしていた。その人外の攻撃に対応していない敵がいけないわけがないのに……

- ああ。貴方、今お友達を捨て駒にしたことに気付いたかしら。

満身創痍にも関わらず、セドナは余裕綽々で天音に語りかけた。

あなたの考えていること、当たり前。そこあたりはさすがに戦いを心得ているわね。

「……！」

どうなると思う？ 私が海中に張り巡らす根が、海底にまで届いてしまったとしたら。私の根に貫かれた、あるいは飲みこまれたものは、妖力を吸い尽くされて管の中で消滅する。人間ならば魂を吸ってあとの入れ物は燃料になるだけ。

「……瑞葉は、消滅しない」

……何ですって？

「ねえ貴方。ただの道具を食べたことはあるかな？」

ザクザクザクザクツ、と紙をぶつ切りにするような音が聞こえた。

その音が段々大きくなり、ザザザギギギザギギギザギギギギギギッ！と、まるで固い木をチェーンソーで切り裂いていくような音が響き渡った。

な…吸収されてくるはずの生命が…あぐっ

「聞いたはずだ。ただの道具を食べたことはあるかと」
直後に、セドナの巨大な体に無数の亀裂が走る。

あ、ぐ…ぎ…まだ、私は…

足掻くセドナにティカがとどめの一撃を撃ちこむ。結局ティカは、真説の魔術を行使しかなかったしする必要もなかった。

大木が、大小様々のパーツに分解されて決壊していく。その巨大な欠片を切り裂いて空に舞う幼い少女がいた。
瑞葉である。

少女はそのまま横にくるくると回転しながら、天音に抱きついてきた。

「かあさ〜ん」

「…母さん？」

ティカは、自分が日本語を聞き違えたのかと思って耳を穿りながら、宙にいる天音を見上げた。

「…親にしては、若すぎるんじゃないか？…っていうかあの子、外見だけじゃ…中身どう見てもババアじゃないか…どんだけロリコンなんだよ…」

「駄弁ってる場合ではないかな、シスターさん。さっきまでセドナを足止めしてて気づかなかったんだけど、寄せ集めたらセドナ並みの強さになる雑魚がだいぶ上陸してしまったんだ」

「あ、言っちゃうけど、そこで自分のせいだつて落ち込んだじゃわなくていいよ？ あれは止めるだけの価値があつたんだから」

「…っていうか、気になるかな。妖は、上陸させないことこそが重要だと思うんだけど、どうして上は貴方達5人程度しか港に配属しなかったのかな。いくらシスターさんが強くても…いくらなんでもこの人に頼りすぎ。3人ぐらいは実戦経験なさそうだったし」

「あ…あいつら！」

隊員のことを思い出して、蒼ざめるティカ。

「大丈夫。あの子たちは嵐山に逃げていると思うかな。さつき万が一のことがあつたら嵐山に逃げるように私が触れまわっていたし。嵐山は今のところは安全だ。…今のところはな」

「…あ、ガールに名乗るの忘れちゃってた。私はティカっていうんだ」

「きちんと偽名を名乗っていらっしやるのかな？」

「もちろんよ。ガールの名前は？」

「私の名前は言いにくくて発音できないかな…天音、ってきちんと言える？」

「…確かに言いにくいからガールってそのまま呼んじゃうね」

彼女らはある意味で、セドナの術中にはまっていた。彼女によつて足止めされていたために、たくさんの敵が上陸してしまつたのだ。

二人の少女は同じ方向を向いて超高速で走りだした。

いつの間にか、空の雲が赤く染まっていた。

天音は、ついこの間までの騒がしい生活を取り戻すために、ティカは、過去に自分が味わつた屈辱を、もう誰にも味わわせないために。

殺人二課京都本部 ……

「どうなってるん…舞鶴を簡単に突破されたなんて」

「ティカ・サーニャ・セラヴィカは何をやっていたんだ!？」

「っていうか…あのマダム・クレセント教会の戦闘シスターでさえ敵わない奴なんて…俺達に倒せるのか…?」

ひとつの弱弱しい泣きごとが、著しく士気を下げた。何しろ、オカルト関連の事件を解決してきたとはいえ、彼らは皆現代っ子であり、実戦経験は皆無なのだ。

「怖いなら出ていけや」

立ちあがったのは一人の男だ。

「戦ってはらわた抉られて死ぬことが怖いならさっさと出ていけ!」

泣きごとを言った男性が、腰を浮かしかけてあたりを見回す。彼の他に立ちあがるうとする者はいなかった。男性は、泣きだしそうな顔で、ドアを開けて逃げるように出て行った。

「なあ悠里」

「?」

「もとに…戻れると思う?もとの…普通の、学生に…」

悠里には、夢乃の質問に答えることができない。

「私らってさあ…何のために戦ってるん?」

彼に問う夢乃の瞳は、虚ろだ。虚ろな目をして問わなければならぬ理由が、彼には理解できなかった。信念が壊れかけている夢乃にどう声をかけるか、一瞬戸惑った。

夢乃は天音が人外存在であることを知っていた。いつも自分を護ってくれる天音のように強くなって、天音に恩返ししようと思っていたのに、土御門や殺人二課のメンバーに、無二の親友を「灰色の存在」と断じられた。それでは、何のために結界術を会得し、何

のために戦うのか、わからなくなってきたも当然だった。

「…あんたの言いたいことはよくわからないけどさ…敵味方関係なく、守りたい者の為に戦うのは当然だろ」

「…！」

「僕は知ってたよ。天音が人間じゃないってこと。だいたい、あの赤毛が染めているわけでもなんでもなくて、天然モノである時点で普通の人間であるわけがない。彼女が自分の体の中から刀を引き出したのも、視ていたんだ。」

あんたならどうだ。いつも一緒にいた友達が、実は悪の存在だと知って、態度を変えられるほどあんたは腰抜けか。違っただろう。だからこそあんたはそうやって迷っているんだろう」

「…私、は」

「僕は割り切つてやるつもりだ。あいつが人間社会になじめなくても、無理やり引き戻す。あいつが嫌がっても、絶対に平凡でつまらない日常に返してやる」

きっぱりと言い切った悠里を、夢乃は眩しいものでも視るかのようには目を細めた。

「それぐらい好きなんやね」

「…まあね」

信じられない。夢乃が天音に質問する度に、顔を赤くして逃げていった女男が、今は本物の男になっている。さらりと夢乃の問いを認めている。

面白くない、と夢乃は思った。そう思うと、茶々をいれずにはいられない。

「…ほんまあんた、ベッタベタの王道なんやから！」

「…お、まえ…（怒）」

「ありがとう。あんたがそう言ってくれへんかったら、うちは迷いすぎて死ぬところやった」

第9節 闇の底

京都中心部を中心に、殺人二課隊員はぐるりと府都を囲むようにして配置された。夢乃と悠里は、頼んでもいなかったのに舞鶴から侵攻してくる異国百鬼夜行を迎え撃つ部隊に入れられた。通達によれば、舞鶴に配置されていた隊員は全員死亡し、ただひとりマリア・クレセント教会から派遣されてきたはずの戦闘シスターだけが行方不明だという。正体不明の、今侵攻中の百鬼夜行とは全く別の百鬼夜行が彼らを助けたという噂も入ってきていたが、二人はあまり信用していなかった。

敵を迎え撃つ隊員たちは皆、自分達が生きては帰れないような気がしていた。隊員の中には、逃げ出す者もいたが、逃げた者の人数は一割にも満たなかった。

彼らには、生きては帰れないかもしれないからこそ、守らなければならぬそれぞれの家族がいる。ここでそれぞれ勝手に逃げればどうなるか、彼らは痛いほど分かっていた。持ちこたえられる限り、家族が逃げて、生き延びる時間を稼がなければならないのだ。

「百鬼夜行が来るぞ！」

千里眼をもつ隊員が、大声で叫んだ。それに続いて隊員たちが一斉に殺気を放つ。式神が召喚され、何も無い空気が発火し、何も無い地面が凍りついた。

闇の中から、まもなくそれらは現れた。

どう見ても、日本古来の百鬼夜行ではなかった。

「エキドナ、スキュレ、ギロ、スフィックス…ひとつの国だけじ

やない、エジプト、ギリシャ、ギリシア…何カ国から来ているんだ…!?!」

隊員の言葉からするに、外国の妖が寄り集まってできた百鬼夜行の連合軍らしい。それにしても、普通の百鬼夜行よりも数が多すぎる。

その絶望を現すような言葉に対して、司令官が答えた。

「連中は、まず京都を制圧して、それから滋賀や大阪に侵攻し、日本を掌握するつもりだ。…この戦い、勝ちなんて期待しない方がいい。戦って、戦って、傷ついても…」

敵が迫りくる。

「お前らは、生きる」

それを合図であるかのように、迫りくる百鬼夜行に隊員達つわものが一気に襲いかかっていった。

「…!?!?ガール、ちょっと待って」

「何かなあ」

天音がイライラしたようにティカを振り返ると、ティカは走るのをやめて、地面に掌を押しつけて何かを考え込んでいた。

「?」

「やっぱり…」

ティカのこめかみに汗が浮かぶ。

「あいつが京都に向かっちゃってる…」

「あいつって誰なのかな。また敵？」

「バルスだ！」

ティカは再び走りだし、天音がその後を追いかける。

「バルスって何？」

「怪物だが、黄泉の国王ハデスの血をひいちゃってる未裔だ。要

するに、落ちぶれて、闇の気に染まりすぎちゃった人間のなれの果てなんだよ。

スケアリ・モ・ルを部下として引き連れちゃって、何の前触れもなく、地下から地面を突き破っちゃって、獲物を捕えて地下の闇の中に引きずり込んで食べちゃうのよね」

「何かな、そのスケアリ・モ・ル…もぐら？」

「正解。もぐらが化けたものを部下にしちゃっている。バルスのことを聴いて貴方はどう思っちゃった？」

「そんなの…地面から突然現れるんだったら、対処のしようがない！」

「そう。…殺人二課は盲点を突かれちゃったのね。あの隊員たちの中で唯一、土壌防御術式を組めちゃうのは、土の属性の式神を使う土御門興亜しかいないんだけど…あいつが行方不明になっちゃった今、敵は必ず守り手から潰しちゃうおとする。そうなればあの殺人二課が危険だ！」

「もしかして…今私達は、その「バルス」の行き先を追いかけているのかな？」

「そうよ。私もあなたも京都の地理には疎いようだけど、バルスを追いかけていれば何もなくても勝手に京都市内に案内してくれる」

「貴方…地面の向こうがわかるの？」

「…私の両目は特別製の「千里眼」だからね。…ガール、もう少しスピード出しちゃいな。走っていたら間に合わなくなっちゃう。建物と建物を飛び移って、あいつより先に京都についちゃってやるんだから！」

「私の方が持久力はある。人妖に着いてこられるのかな？」

「まあ失礼しちゃう！これでもだてにセカンド・ホーリーとして活躍してるんじゃないんだぞ」

（日本語がなんとなく可笑しいな）と天音は思ったが、今は何も言わず、テイカの言うとおりにした。冗談を言っている状況ではな

か
っ
た
か
ら
だ
。

第10節 バルスVSティカ・サーニャ・セラヴィカ

京都に近づくにつれ、凄惨な状況が見えてきた。町のビルは全て破壊され、住宅街がめちゃめちゃになっていた。

「皆は……」

「大体は避難しちゃった。残りの3割は行方不明だけれど」

「……」

拳を握りしめる音。掌の皮膚が軋んで、ギリイツと唸った。先頭をゆくティカは、振り返らずに下を凝視したまま天音に問いかける。

「貴方。今何考えちゃった？」

「……」

天音は前を見据えたまま何も答えない。バルスの動きを追って、前を見ることのできないティカの代わりに、ティカの死角を警戒していた。

「また、自分がもう少し強かったらいいのとか、自分に皆を護るだけの力があればいいのとか、そんなふざけたこと考えちゃってました？」

「……ティカ……！」

怒りを抑え込んだ低い声が、ティカにぶつけられる。

「……貴方は、本当は何も考えちゃわなくていいのに。貴方は、自分の家族のことだけ考えていたらいい。そんなふうに、国民レベルの人の命のことを考えちゃうのは、私達の仕事なのに」

「家族……？そんなの、いない」

「……貴方、私よりも日本語できないのね。この「ファミリー」の言葉の意味考えちゃったことある？家族ってのは肉親を指しちゃう言葉じゃない。友達、恋人、親切な人は、皆隣人、つまり家族ってことになっちゃうことを知りませんでしたか？」

ティカは、ものすごく人をバカにしたような口調で、しかし的確な指摘をぶつけてきた。

「!...」

天音が答える前に、ティカがいきなり言った。

「もうすぐ着いちゃうよ」

京都府庁から半径100?を、殺人二課隊員がぐるりと取り囲んでいた。外国の妖を集めたような百鬼夜行が、円陣の一部を攻撃して交戦している。

そこにバルスが急速に接近していく。同時に、府庁に続く大通りにビキビキと現れる大きなヒビを天音は視認し、ようやくバルスがすぐ下にいるという実感を理解できた。

「ガール。バルスを殺す自信はあるか」

「言われなくても殺るけど?」

「じゃあ、」

とティカは未だにセドナの木の根が巻きついたままの左足を振り上げ、天音の背中を蹴りつけた。人間技とは思われない巨大な負荷によって、天音は思い切り前に押し出され、殺人二課と異国百鬼夜行の交戦現場に突っ込んでいく。受け身をとるうにも、あまりにも突然すぎ、また、あまりにも強い力で、天音は自分の体が下へ放り出されていくのを止められなかった。

「なっ...受け身が、とれないっ...!?!?」

「この戦いは、私だけが責任を負っちゃっていいじゃない。貴方はもう、殺しちゃいたいがために殺しちゃったらいけない。貴方は、自分の家族を守るためにその力を使っちゃいなさい」

「ティカツ...!!」

天音の視界の中でどんどん小さくなっていくティカは、微笑んだまま、バルスが飛び出してくる真下に向けて発砲した。ドオン!と激しい銃声、というよりも爆音が鳴り響いた。

「ぐっ……」

不意を突かれたからといってこのまま何も無しに激戦区に突っ込んでいくほど天音はバカではない。天音はぎりぎりのところで自分の体をようやく制御し、自分の体から五つの刀を解き放つ。

馬鹿だ。なんて馬鹿なんだ。

(あのシスターは気付いていた…セドナを見た時の、私の殺意が、溜火の殺人衝動から来るものだと)

その衝動は、妖特有のものだ。

これ以上衝動によって溜火を振るっていけば、私はいつかきつと壊れてしまう。あの女は、それを身をもって教えてくれた。

理由もなく戦っているとはいけない、簡単に衝動で敵を殺してはいけない。人間の「霊能者」も、人妖も、完全な妖にならないために自分が戦おうと思った「理由」を、常に心に留めていなければならぬことを。

その警告は、たとえ溜火が降魔剣であって、人間に対して殺意はなくても、たとえ天音が真羅刀のなりそこないでも、人間でもなく妖でもない「人妖」の状態がどれだけ危ういかを彼女に思い出させる。

その時、天音は、京都中に散らばっていた真羅刀の人妖達が自分のもとに帰ってくる妖気を感じた。

・母さん…呼びましたか…？

今の私には母さんが悲しんでいることしかわかりません

泣かないで。泣いている理由を消し去りたいから、私達を呼んだのでしょ

「…」

そっか。今のはこいつらが勝手に帰って来たんじゃないから、私の心が呼び寄せたのか？

心というものはわからない。

「貴方達。私に従うと言ったよね」

数多の刀達が天音を取り囲む。

「…私に続き、あれを蹴散らせ」

彼女が指さしたのは、次から次へと押し寄せてくる異国の百鬼夜行だった。

ティカは微笑んだまま、マスケット銃の銃口を、真下にいるバルスに向けて発砲する。

銃口が火を吹いて弾丸を吐きだすと、弾丸はミサイル並みの速度でバルスを攻撃する。白煙が、地上を覆い尽くした。

ティカはじつと真下を睨み、バルスがまだ生きていることを知り、そして今までのような射撃はバルスに通用しないことを学習する。彼女としても、バルスとの戦闘は初めてだった。

「Musket.Determination of target
et.Shoooting start!!!」

魔術的な要素などほとんど垣間見えない詠唱の直後。風も吹いていないのに、彼女が着ている真紅の修道服のスカートが、ひとりではためく。

スカートにとりつけられたスリットの間から、ガチャリと、真

っ赤なマスケット銃が出てきた。一丁だけではない。ストックがワイヤーに繋がっているマスケット銃が、何十丁も出現する。

イメージとしては、ロープにかけられた洗濯物。ロープをワイヤー、洗濯物をマスケット銃に置き換えると想像できる。銃のストックにつけられた金具とワイヤーが繋がっているのだ。そして銃口は常に使用者の周りへ向けられており、十分な殺意を感じさせる。外に出たワイヤーの末端には何故か指輪が取り付けられて、ティカの薬指におさまっている。

その指輪こそが、ティカがシスターである証拠だった。

出現したマスケット銃は70丁。これだけのものを彼女は一瞬で出現させた。

バルスが、真上にいるものに気付いた。

部下を引き連れて、ティカが立っている建物の屋上にまであつという間に追いつき、一斉に彼女に飛びかかる。

ティカの従来の戦い方は、彼らには通用しない。射撃は、相手から距離をとって初めて成り立つものであり、標的にいきなり接近されれば力は一気に半減してしまう。

しかし、ティカが操る魔術は、その射撃の欠点を無理やりに消し去った。自分の精神力と魔力で弾丸を錬成し、ワイヤーを通して、無数の銃に次々と弾を装填する。そうして、同じ方向に向けられたいくつもの銃口から、大きな魔力のこもった弾が放たれる。

かくして、ティカに飛びかかってできあがったもぐらの山は、一気に弾き飛ばされた。

「部下に頼るのは愚の骨頂よ、バルス……」と、ティカが口を開いた。もはや日本語で話す必要もない。しかし、相手はギリシア妖怪

である。英語が通じるかどうか自体わからなかったのでラテン語で話してみたティカは、内心「通じただろうか？」と気をもんだ。

「貴方のお父さんがさつさと出てくればいいのに。そうよねえ、どうせ貴方のお父さんはハデスではないものねえ？」

- 黙れえええ!!! -

撃ちたおされたモグラが再び飛びかかってくる。彼らは今度は、宙に浮くマスケット銃の銃口に噛みついた。

「!？」

すでに弾を装填し終えていたティカは躊躇する。

ゼウスは鉄によって造られた生物をハデスに与えた。我らは刀、鉄砲、斧など、たとえ魔術の品でも、少しでも金属成分が含まれている物質による攻撃を吸収し、吸収した力を最大限に生かす。

自分の弾を撃ち返されて自滅する気分はどうだ…？

(や…ばっ…術式が…)

考えている暇はなかった。敵の言うとおり、モグラの体内が鉄で構成されており、たとえ魔術の品でも少しでも金属成分が含まれている物質による攻撃は「吸収し吸収した力を生かす」のなら、無駄に精神力を削られかねない。

しかし、精神力の安定のために錬成する弾の成分を変えたくても、今の術式の構成ではそれができない。「撃ちこまれた弾に含まれた魔力によってダメージを与え、抑え込んだ精神力によって、標的を自爆させる」という一撃必殺の術式を造ってしまった以上、今のティカに術式を変更し、新たな術式を構築している時間はない。

躊躇したティカの間を突いて、部下の中で一番大きなモグラの一

匹が凶悪な牙を向いてティカの頭に噛みついた。同時にマスクェット銃の引き金が引かれる。

第11節 囚われの戦士

ティカの頭に噛みつき、そのまま咀嚼しようとしていたモグラは、
気味悪い悲鳴をあげて突然自爆した。

「…血なまぐさい…っっていうか何が哀しくてモグラの内臓を頭から浴びないといけないんだよ…」

気味悪いべとべとしたものと頭上の血だまりを、ティカはベシベシと払い落とす。しかし、ティカは内心、自分の魔眼が勝手に何か奇跡を起こしたことに驚いていた。

「…アーサー…貴方なの？」

問いかけてみても、もちろん答えはない。

（私に移植されたこの魔眼は、拒絶反応のせいで「千里眼」以外の力を失ったはずじゃなかったのか…？）

そのはずだった。

それなのに今、ティカの両目は、モグラの体を破壊した。

しかし、やはりティカに考え込む時間はない。ティカの弾を受け、さらにダメージが加わったはずのモグラ達が妙にピンピンしている。

「聞いてない…！？」

言っただろう、攻撃を吸収し、最大限に生かすと。

モグラ達の口が、あんぐりと大きく開かれる。その口の中から閃光が発せられる。

ティカは咄嗟に宙に跳躍しながら巧みにワイヤーを操る。ティカがさきほどまでいた屋上に閃光があたり、大きなクレーターが開いて、また爆発事故が起きた。

煙が晴れると、瓦礫に小さな異変が起こる。

まるで、内側から沸騰するように、ぼこぼこ泡立って、コンクリートの瓦礫が気味悪い紫色に変わっている。

「なるほど…私の術式をパクったね。私の魔力をそのまま横どりして、精神力だけを貴方達の精神力にとり替えちゃったと。それで、貴方達の精神力が加わった攻撃の特性は、物を溶かしちゃうこと。ふうん」

ヒュルンツ、とワイヤーが動いて、

バルスの部下の7匹のもぐらの首に巻き付きしめつける。またテイカの目の前でワイヤーがぐるりと7丁のマスケット銃を巻き込んで円を成す。形成された円の縁から赤い光線が出て魔法陣を形成する。

「即興の大砲でも50mぐらいは飛ばせちゃうんだよこれでも」
テイカが描いた炎の魔法陣が白い炎を噴き出すと同時に、またマスケット銃が発砲される。7つの弾の速度に爆焰の速度が加算されて、それこそ大砲のような威力でモグラ達を焼き尽くす。

「ほらボス。部下がやられちゃったけど？…わからないな。貴方はどうして本気を出しちゃわないの？」

なら、本気を出してもいいのか？

「っ！」

たったそれだけの言葉の次に、痛すぎるほど冷たい殺気がテイカの全身を蝕んだ。自分は死ぬかもしれないという悪寒が、脊椎の神経を支配する。

それでも。

テイカは敵に背を向けない。

敵はテイカの答えを待たなかった。

バルスは、巨大なモグラの容姿が真つ黒に塗りつぶされたような姿をしていた。

- 影と戦え。己と戦え。貴様の強さを見せてみる。

バルスの姿が、ドロリと溶けてまるで影のようになった。影の表面に、まるでジューズをこぼした時のような波紋がなびき、それはティカの視界を覆い尽くしていく。何か嫌な予感がして、咄嗟に距離をとつても逃げられなかった。

あたりは真つ暗闇が広がるばかりだった。そこに佇むのは自分一人ではなく、自分とそっくりな少女。

「よお。殺しに来たよ、ティアラ」

自分とそっくりな声で、もう一人のティカは、ティカの抹殺を宣言した。

「っ！」

「武器は使えないよ、ティアラ」

偽ティカが、とっさに付け加える。「ティカ」というのは、偽名なのだ。

「誰」

「私は、私だよ」

そっくりだった少女の姿に異変が起きる。金髪が銀髪に変わり、真つ赤な修道服が真つ蒼になった。

「貴方…むかつくなあ」

ティカはついにつすら笑いを浮かべるのをやめた。

「何がむかつくってどういうの？」

偽ティカの後ろに、いつの間にか佇む人影がいた。その人間の顔は、ティカが忘れもしない男性のもの。¥

「…アーサー？…ううん」

ティカはふと我に返って頭をぶんぶん振った。

おそらく、こうして元の世界の景色が見えなくなった時点で、自分バルスの術中に嵌ってしまったのに違いない。こうして自覚した以上は気をつけなければ…一体何をされるかわからない。

「貴方は、人間は白、妖は黒という考え方を信じているの？」

「…ちょっと前までは信じていた。だけど、今は分からなくなっている」

どうして？

偽ティカに問われたティカの脳裏に、一人の少女が浮かぶ。

「全世界の人間が、そんな考え方を信じたら…生きる権利があまりになっちゃう子がいるからね」

「…あのソード・サタンが？」

「あの子のことをそんなふうと呼ぶのはやめてくれないかな、バルス。貴方、私の過去の姿に化けて喋ったら私が簡単に騙されると思ってた？」

あの子、人間に戻りたがっちゃっていた。だけど、事情があつて人間に戻れなくなっちゃっているみたいだった。…あの子には戦う理由があるのに、セドナを殺した時は殺害衝動に突き動かされていた。あの子は戦うことに向いていないんだ。ただ衝動に任せて殺していたら、あの子の心はきつと壊れる。

本当はあの子、誰かに守ってもらわなければならぬくらい、危うい。だから、貴方があの子に手を出しちゃうとか言っちゃうなら、許さない」

「へえ。だから、私と彼女を戦わせることはしなかった、と」
バルスは、正体を看破されても変化を解かずに、ティカそっくりの容姿と口調で話し続ける。

「興味が出てきちゃったなあ…少女を護ろうとしたヒロインが、操られて少女を殺そうとする、っていうのはどう思う？」

「…！」

「私の言っている意味、わかっちゃってるよね」

「…やめろ…！」

はじめてティカの顔に恐怖が宿る。

「どちらかは絶対に殺される。どちらかが命を終える前に、貴方は私を打ち負かさないといけないよ？もちろん、武器なしで。大丈夫、私だけ有利だなんて余計な条件はとっぱらっちゃうから」

第12節 精神攻撃

「！」

戦の真つただ中にいた天音は、壮絶な悲鳴を聴きとつた。まるで、圧倒的な力を前になす術もないような、絶望を前にしてもう耐えられないというような悲鳴。

そしてその声には聞き覚えがある。

「テイカ…？」

正体不明の力の余波が、あたり一面を吹き飛ばす。天音達を取り囲んでいた敵勢が、一気に遠くへ薙ぎ払われ、天音の目の前にはただ一人の人間だけが残つた。

「…なんで、かな…一番強そうな貴方が…」

どうしてバルスに体に乗っ取られているのかな

あ

天音をまっすぐに射抜くその目に、明らかに別人の面影があつた。両目の瞳から、正気というものが失われている。

「バルスは、闇の中でしか動けない生き物だ。日の下に出るには、人の体を借りなければならぬのさ」

「テイカは貴方に取りつかれるような奴じゃないんだな。そのシスターに何をした」

「このシスターの攻撃特性を知らないか？」

このシスターが使う魔術は、マスケット銃によって行使される。装填される弾の構成成分は、術者の精神力、そして魔力だ。だから、この女の精神力が弱かつたせいでこうなつたわけではない。

私の力も、同じだ。吸血鬼が噛みついた人間が吸血鬼になるように、バルスが噛みついた人間はその時点で私の夢世界にひきまかれ、操り人形になるのさ。

とはいえ、隙を造ることには苦労したさ。この女は力は十分にあったが、不意打ちは苦手だったようだ」

「…私を、殺しに来たのかな」

「その通り。貴様だけではない。人間でもなく、妖でもない、「人妖」など、いてもらっては困るのさ」

「何で？」

「我々の願いを邪魔する存在だからさ」

「だから何で？何で私達が生きていることが貴方達の願いの邪魔になるのかな。」

何が気に入らないって…貴方達がやるうとしてしていることは、例えば正しくても結局人間が嫌な思いして死んでいくってことなんだよお！！」

蒼崎天音とバルスが一騎打ちに踏み切った。バルスがティカの技を奪い取って発砲したが、天音はマスケツト銃を一刀両断する。バルスは後に大きく飛んで距離をとり、またもティカの魔術を行使した。マスケツト銃が何十丁も出現する。

「だ・か・らあ、ティカの所有物パクるのはやめられないのかなあああああああ」

ティカが発砲する直前に、天音は信じられない速度で距離を詰めて、わずかにティカの足を払った、が…

避けられたあげく、天音は足で頭部を蹴り飛ばされた。

「ぎ…あつっ！」

その脚力は、まるで人間ではないかのよう。

…人間ではない？

「まさか…」

「わかっちまつたか。このバルスが選ぶ器つて、最後には妖になつて消滅することが多い。超能力をもつ人間の身体構造は、常人とは少し違う。それゆえに、体に無理やり宿ったものの影響を体細胞がまともに受け、妖化が進むのさ」

「な…に…？」

「さあさあ立てよ。急がないと、せつかく人間は斬らない貴様でもこの女を斬ってしまうことになる」

こいつは、楽しんでいる？

…こいつは、そういう性か。

過激な妖は、人間を弄んで喜び、人間の中の弱者は、妖は皆敵だと思ひ込む。

「ちつくしょう…」

天音は、ぐらぐらする頭を押さえつけて立ちあがった。

人間も妖も、大っきらいだ。

「素手でやりあう。この状況で、私に確かな腕があるとは思えない。今ここにあると思っっている体も、おそらく幻。おそらく、この世界にあっちゃってんのは私の意識だけでしょう？」

「正解、分かりやすく言うと、私から繰り出されちゃう精神攻撃

にどこまで耐えられちゃうかってことだね」

「…」

ティカは視界が再び霧で歪んでいくことに気付いた。

気が付くと、偽ティカはどこにもいない。その代わりに、ティカの目の前に佇んでいたのは ……

「アーサー…?」

疑心暗鬼のままティカは尋ねた。どうせあいつの罠に決まっっている、と思いながら、ティカはつかつかと彼に近づいていこうとする。

「来るな!」

焦ったような怒声に、ティカはびくつと足を止めた。そして我に返ったように頭をぶんぶんと振った。

どうしてだろう。私は今、嵌りかけた?

アーサーは切なそうな視線を投げかけながら、ナイフを振り回してティカに駆け寄る。驚いたティカは彼の攻撃を避けたが、彼は執拗に彼女に斬りつけようとする。

「な、に…!?!?」

あいつの罠だ。切なそうに、哀しそうに、何かを訴えかけるように視線を向けてくるあの表情も罠だ。ティカは何度も何度も自分の頭に言い聞かせる。

しかし、ティカはバルスの罠から逃れることはできない。

かつてティアラには恋人がいた。

理性も吹っ飛ぶくらいに惹かれあってしまった恋人がいた。

第13節 一瞬の迷い

「!？」

ティカを乗っ取ったバルスの身に異変が起きる。

まずその異変は、ティカの両足、膝から下に起きた。両足に巻きついている何かが、紫色の光を放つ。

「な…に…!？」

よくもやってくれちゃったねえ…

次の瞬間、ティカの足が動いた。ティカの膝蹴りが、ティカ自身の腹にヒットする。

これは、あなたのお仲間のセドナちゃんに感謝しちゃわれないといけないかもだね…きっちり落とし前はつけさせちゃってもらうぜ

ぞわりぞわりと、ティカそのものの殺気が放たれる。

「馬鹿な…どうやって私の幻覚を破った!？」

「私は別に何もしちゃあいないよ」

ティカは勝ち誇った表情で、見えぬ敵に語りかける。

「あなたがどんなに私の体を支配しちゃっても、決して支配できない器官がひとつだけあるのが分かっちゃってるかな?…答え待つの面倒だから言っちゃうけどね、

魔眼だよ。あんたに体を奪われちゃっても、唯一私に所有権が残っていたのは、その魔眼だ！」

！！

「私は本来、あの時に両目を失っていたはずだった。だけど、もう助からないって言われていたあの人が、私に目をくれたんだ。もともと特別製だった彼の魔眼は、私の体には合わなくて大半の力を失ってしまったけれど」

…その両目…貴様のものではなかったのか！！！

「アーサーの魔眼はオカルトやSFとかの「異常な力」を何でも破壊する。」

…その破壊範囲には、あんたも例外じゃないんだ」

「ガール！私の視界から逃げろ！今から私の視界に入ればあんたも死ぬから！」

テイカの怒声が天音の耳を貫く。瞬時に天音は「子供たち」に命令を飛ばした。

(シスターに攻撃は不要、この女は味方だ！この女の視界に入らないように気をつけながら敵勢をそのまま蹴散らせ！)

(けれど母さん、この女にとりついているものがまだ生きています)

(憑きものが何かしてきたら、どうしますか)

（そいつはきつとシスター自身の手で殺られると考えた方がいいかな。今はとにかくシスターの視線を避ける！）

天音の命令に、何の疑いもなく従った真羅刀達は、そのまま跳躍して、テイカの死角に移動する。

本来テイカに所有権のない、魔眼の真の力。その力の行使は、テイカ自身にも大きな負荷が襲う。

まずテイカは、内なるものの排除に邪魔な敵をひと睨みして、一帯の敵勢を瞬殺した。敵が態勢を立て直すまでのタイムラグ10秒のうちに、テイカは内に憑くものの排除を実行する。

両目が、ぐりんと白目をむいた。

バルス、貴方には消えちゃってもらう。

バチイン！と、何かが弾けるような音を聴き、天音はとっさに振り返ってテイカの後ろ姿を見た。テイカが、両目を閉じて、地面に倒れていくところだった。

「テイカ！」

天音は急いで彼女に駆け寄る。

「だい…じょうぶ…魔眼を使うには…マラソンを走っちゃうときみたいに、体力が、いっっちゃうんだ…」

「どつちにしてもあなたは戦闘不能かな」

天音は座り込んだまま、苦笑いして言った。その背後に迫る敵を、地面に座ったままの天音の髪が刀と化して切り裂く。

「あんたをこれから二課の陣営に帰す」

そう言って、天音がテイカを背負うために彼女の肩に手をかけた時だった。

地面に、びきりと嫌な音がしてヒビが入る。そのヒビは、ちょう

天音は逃げられなくなった。

その気になれば彼女は逃げられるはずだったのに、何故真価を發揮できなかったのか。しかし、彼女が本来の力を行使する前に、彼女の左胸を深々と、かすかに脈打つ触手が貫いていたのだ。

すぐ近くまで来ていた悠里の顔が、驚愕に染まる。

彼もまた、彼自身の真価を發揮できなかった。そのまま發揮すれば、天音の体までも彼の雷撃に貫かれてしまうからだ。

「人間も…妖も…ほんと馬鹿…」

天音の炎が、

地面に、

消えた。

第1節 目覚めたそこは歪な世界

五感がなくなった。

視覚が、

聴覚が、

嗅覚が、

触覚が、

全て消え去った。

消滅とはこんなにも華麗で美しいものか？

けれども、白い世界は、ほんの数秒で崩壊してゆく。

生きている。

…生きている？

目を覚ますと、天音は檻の中にいた。かなり広く造られた檻の中に、人間達がうなだれて座り込んでいた。深い絶望を含んだ空気が漂っていた。

格子の外を見ると

：

「う…そ…」

見るも無残に破壊された京都の市街地が広がっていた。こんな世界の中に生存者がいるとは思えない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0236y/>

蒼焰舞 Ruka

2012年1月14日17時46分発行